

令和7年度

講義要項

経営学研究科経営学専攻

博士前期課程

埼玉学園大学大学院

成績評価について

〔成績評価の方法〕

授業科目毎の成績評価方法は各科目のシラバスに記載されています。評価項目ごとに配点比率が明示されていますので、確認してください。

〔成績評価の内容〕

成績は、「S」「A」「B」「C」「D」と表記されます。このうち「S」「A」「B」「C」は合格です。合格と判定された科目には所定の単位が与えられます。「D」と表記された科目は不合格ですので単位は修得できません。具体的な評価内容は以下のとおりです。

素点	100~90	89~80	79~70	69~60	59~0
成績通知表	S	A	B	C	不可
成績証明書(和文)	S	A	B	C	表記しません
成績証明書(英文)	S	A	B	C	表記しません
合否	合格				不合格

※ 令和4年度までの成績評価で、素点が90点以上だったものは「S」として取り扱います。

目次

経営学特論（工藤 悟志）	1
経営組織論特論（文 智彦）	2
医療経済特論（一戸 真子）	3
ヘルスケアサービス・マネジメント特論（一戸 真子）	4
労務管理特論 ※本年度休講	5
地域企業論特論（塩谷さやか）	6
国際経営特論（工藤 悟志）	7
マーケティング特論（水野はるな）	8
経営史特論（平田 礼王）	9
アジア経済事情特論（平田 礼王）	10
会社法特論（高橋 均）	11
財務会計特論（篠原 淳）	12
管理会計特論（横井 克宏）	13
国際会計特論（篠原 淳）	14
会計監査特論（笠井 浩一）	15
簿記特論（大塚 浩記）	16
経営財務特論（中沢 浩志）	17
租税法特論（岡部 洋一）	18
法人税法特論（横井 克宏）	19
所得税法特論（會田 耕児）	20
相続税法特論（香取 稔）	21
消費税法特論（森田 修）	22
国際租税法特論（岡部 洋一）	23
環境会計特論（劉 博）	24
金融論特論（花崎 正晴）	25
国際金融論特論（秋場 勝彦）	26
貨幣論特論（藤井 大輔）	27
証券市場特論（鯖田 豊則）	28
リスク・マネジメント特論（冨家 友道）	29
研究指導Ⅰ・Ⅱ（一戸 真子）	30
研究指導Ⅰ・Ⅱ（花崎 正晴）	31
研究指導Ⅰ・Ⅱ（岡部 洋一）	32
研究指導Ⅱ（佐藤 正勝）	33
研究指導Ⅰ・Ⅱ（塩谷さやか）	34
研究指導Ⅰ・Ⅱ（篠原 淳）	35
研究指導Ⅰ・Ⅱ（中沢 浩志）	36
研究指導Ⅰ・Ⅱ（藤井 大輔）	37
研究指導Ⅰ・Ⅱ（文 智彦）	38
研究指導Ⅰ・Ⅱ（工藤 悟志）	39
研究指導Ⅰ・Ⅱ（秋場 勝彦）	40
研究指導Ⅰ・Ⅱ（平田 礼王）	41
研究指導Ⅰ・Ⅱ（水野はるな）	42

授業概要

経営学特論では、企業経営の根源的な問題の一つである「経営と倫理」の関係をテーマとする。本講義におけるアプローチは、日本の代表的な企業者を取り上げて、その倫理思想を中心に検討し、資本主義の発展過程において企業倫理の問題がどのように議論されてきたのかを考察する。本講義で取り上げる企業者は渋沢栄一とする。

授業計画

第1回	ガイダンスー講義計画ー 経営倫理について
第2回	経営倫理とは(1)ー企業と社会ー
第3回	経営倫理とは(2)ー企業の不祥事ー
第4回	経営倫理とは(3)ー企業統治のあり方ー
第5回	渋沢栄一の事績と思想
第6回	渋沢思想の淵源(1)ー渋沢思想の基礎的考察ー
第7回	渋沢思想の淵源(2)ー徂徠学・水戸学の正名論ー
第8回	渋沢思想の淵源(3)ー論語講義の儒学的分析ー
第9回	渋沢思想の淵源(4)ー渋沢思想とヴェーバー理論ー
第10回	渋沢思想の淵源(5)ー論語と算盤ー
第11回	渋沢栄一の経済思想(1)ー自由主義経済思想ー
第12回	渋沢栄一の経済思想(2)ー田口卯吉との対立ー
第13回	渋沢栄一の経済思想(3)ー渋沢の商業擁護論ー
第14回	渋沢栄一の経済思想(4)ー合本主義への道程ー
第15回	演習のまとめ
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、「経営と倫理」に関する知識を高度なレベルで修得することを到達目標とする。これにより、いかなるテーマで修士論文を作成する場合でも、経営について倫理的側面から検討を加えるにあたって必要な知識と、その応用を可能ならしめる力量を蓄える。

履修上の注意

対面授業形式で行う。第5回講義までの資料表紙には、資料内容を理解するうえで重要なキーワード、課題レポートの「テーマ」、「提出期限」、「分量」などを明示する。課題レポートはワード形式で提出すること。講義資料の末尾には必要に応じて「まとめ」と「参考文献」を表示する。第6回～15回講義は参考書の各章を読み込み、指定するテーマに基づいて毎回レポートを提出すること。参考書は受講者が入手すること。

評価方法

毎回の講義で指定するテーマに関する課題レポートの評価を60%加味する。期末試験は全講義を通して学んだ内容に基づいた論文作成を課し、その内容評価を40%加味する。

テキスト

参考書：坂本慎一『渋沢栄一の経世済民思想』（日本経済評論社、2002年）。

授業概要

本特論では、経営組織論を研究する上で必須の基本的な理論・学説を講義する。
 組織における人間行動を理解するために、個人の問題やグループの問題、組織構造、職務設計、組織変革などを中心に講義する。

授業計画

第1回	概要
第2回	組織における個人の行動
第3回	パーソナリティと感情
第4回	モチベーション論の基礎
第5回	モチベーション論の応用
第6回	個人の意思決定
第7回	組織における集団の行動
第8回	チームの理解
第9回	コミュニケーション
第10回	リーダーシップ
第11回	権力と政治
第12回	コンフリクトと交渉
第13回	組織構造
第14回	組織文化
第15回	組織変革
第16回	総括

到達目標

本講義は、経営組織論について体系的に理解しかつ批判的視点から理論を考察するための基本的な知識を習得することが目標である。

履修上の注意

事前に文献を読み理解し、授業内では積極的に議論に参加することを求める

評価方法

ディスカッション（20%）・プレゼンテーション（20%）・レポート（60%）により評価

テキスト

授業内で紹介

授業概要

病院の起源に近い施設等は多くが教会や寺院によるものであり、病気の治療や療養など、病んでいる人々や苦しんでいる人々を救済するものであったが、今日では、医療は巨大な産業となっている。サービス提供側の病院建設費用、医療機器、電子カルテどれもが高額であり、サービス消費側も多くの場合、保険システムを活用し医療費を支払っている仕組みとなっている。社会保障費全体に対しても医療の占める割合が大きい。多くの薬品や医療材料などがグローバル市場であり、またメディカル・ツーリズムに代表されるような国内にとどまらないヘルスケア商品が市場に出てきている。本講では、健康・保健・医療・福祉・介護を含むすべてのヘルスケアの分野において、経済学的アプローチがどのように重要であるかについて講義する。すべての人々が健康で質の高い保健医療サービスを受けることができるようにするにはどのような市場が望ましいかについても理解を深められるよう講義する。さらに、今後益々競争が激化する医療のグローバルビジネス戦略についても講義する。

授業計画

第1回	医学史から見た医療経済
第2回	社会保障と国民医療費、公費負担医療、保険料と患者負担
第3回	医療サービスの特殊性
第4回	医療技術評価 (HTA: Health Technology Assessment)
第5回	費用対効果
第6回	根拠に基づく医療 (EBM: Evidence Based Medicine)
第7回	意思決定を市場に委ねるメリットとデメリット
第8回	効率性 対 公平性
第9回	診療報酬制度、介護報酬制度、薬価制度、混合診療、自由診療
第10回	出来高払いと包括払い、DPC、ホスピタルフィーとドクターフィー
第11回	医療費抑制の仕組み
第12回	患者・利用者満足度、職員満足度
第13回	幸福の経済、加齢の経済、福祉レジーム
第14回	メディカル・ツーリズム
第15回	ナッジ
第16回	期末試験

到達目標

- ① 医療サービスの特殊性と経済の関係について説明できる。
- ② 医療技術評価の世界的潮流について説明できる。
- ③ 診療報酬のあり方を含め、医療サービスとコストとの関係について説明できる。
- ④ アウトカムと経済性について分析できる。
- ⑤ 患者の意思決定と市場の関係について考察できる。

履修上の注意

医療費の増大や薬価の高騰等の問題も含め、できるだけ身近に感じていただきたい。
予習・復習各 90 分程度。

評価方法

レポートおよび発表 40%、試験 60%

テキスト

大竹文雄・平井啓編著 『医療現場の行動経済学』東洋経済新報社 2021年

授業概要

世界中のどんな人々もできるならば最善のヘルスケアサービス（ベスト・プラクティス）の提供を望んでいるはずである。本講では、ヘルスケアサービス提供分野においては、ベスト・プラクティスを目指すためにどのようなマネジメントが必要であるか、またベスト・プラクティスに影響を及ぼす要因にはどのようなものがあるかについて、多面的に理解を深めることを目的とする。さらに、ヘルスケアサービス提供過程は大変複雑であるので、健康・保健・医療・介護・福祉の各サービスはどのように関係し、連携すべきであるかについても講義する。医療・介護施設経営を例に、マネジメントの重要性についても講義する。

授業計画

第1回	ヘルスケアサービスの定義・範囲
第2回	ヘルスケアサービスの質
第3回	健康・保健・医療・介護・福祉分野におけるマネジメント
第4回	医療・介護経営 ① 組織、理念、価値
第5回	医療・介護経営 ② 開設主体、規模、部門、機能
第6回	医療・介護経営 ③ 人的資源、リーダーシップ、ワーク・ライフ・バランス
第7回	医療・介護経営 ④ 教育、研修、キャリアパス
第8回	医療・介護経営 ⑤ 物品管理、SPD、業務委託
第9回	医療・介護経営 ⑥ 情報システム、電子カルテ、シミュレータ
第10回	医療・介護経営 ⑦ 療養環境、栄養管理、ホスピタリティ、アメニティ
第11回	医療・介護経営 ⑧ 安全、感染管理、プロフェッショナリズム、パターンリズム
第12回	医療・介護経営 ⑨ スタンドアードと評価、第三者、説明責任、質改善、情報開示
第13回	医療・介護経営 ⑩ チーム医療、地域包括ケア、連携
第14回	医療・介護経営 ⑪ インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオン、意思決定、臨床倫理
第15回	まとめ：ベスト・プラクティスのために
第16回	期末試験

到達目標

- ① ヘルスケアサービスの特徴と質について説明できる。
- ② 医療・介護経営における重要な各要素について説明できる。
- ③ ベスト・プラクティスのために求められる視点について分析できる。
- ④ 健康・保健・医療・介護・福祉分野におけるマネジメントのあり方について考察できる。

履修上の注意

病院や診療所を利用することは特別なことではなく、医療サービスや介護サービスを利用することは誰もが経験することであるので、1人の人間として是非関心を持って受講していただき、質の向上について積極的に考えていただきたい。

予習・復習各90分程度。

評価方法

レポートおよび発表 40%、期末試験 60%。

テキスト

クレイトン・M.クリステンセン著

『医療イノベーションの本質』 中央経済社 2016年

授業概要

--

授業計画

第1回	
第2回	
第3回	
第4回	
第5回	
第6回	
第7回	
第8回	
第9回	
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	
第14回	
第15回	
第16回	

到達目標

--

履修上の注意

--

予習・復習

--

評価方法

--

テキスト

--

授業概要

本講義では、世界的な競争の中で海外企業との競争激化に直面している地域企業、地域中小企業の課題、問題点をケーススタディを通じて学ぶと共に、自ら地域企業、地域中小企業の課題、問題点を抽出し、解決策を提案することを目的としている。また、受講生の研究テーマに関わる地域企業、地域中小企業を取り上げ、その実態を講義することで、研究内容を深めることに努める。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	受講生の研究テーマと本講義について
第3回	地域企業と地域企業の海外進出戦略
第4回	地域企業と地域企業の海外進出戦略
第5回	各自プレゼンテーションと討議
第6回	地域ブランドと産業振興
第7回	地域ブランドと産業振興
第8回	各自プレゼンテーションと討議
第9回	地域企業と中小企業の課題と発展可能性
第10回	地域企業と中小企業の課題と発展可能性
第11回	各自レポートの発表と討議
第12回	受講生の関心のある企業のケーススタディのプレゼンテーション①
第13回	受講生の関心のある企業のケーススタディのプレゼンテーション②
第14回	受講生の関心のある企業のケーススタディのプレゼンテーション③
第15回	受講生の関心のある企業のケーススタディのプレゼンテーション④
第16回	定期試験

到達目標

地域企業と地域中小企業を学ぶことで、国内外の経済社会の変化と今後を展望できる能力と問題解決能力を身に付けることができる。また、論文作成の基本的な論点整理に繋がる分析力を備えることが出来る。

履修上の注意

本講義では、学生と講師によるディスカッションを大切にしたいと考えている。

予習・復習

- ★事後学習として、授業で取り上げるケーススタディに関する課題レポートを課す。
- ★企業を取り巻くグローバル経済・社会の最近の動向について、新聞記事・テレビでニュース・インターネット等を活用し企業の経営活動や経営戦略を定期的にフォローすること。
- ★関心のある企業の「経営」（多くの企業で「中期経営計画」として企業のホームページでの「企業情報」や「IR（投資家向け情報）」に公表されている）を読み（ホームページで閲覧可能）、専門用語等についての理解を深めておくことが望ましい。

評価方法

課題提出（50%）、定期試験（50%）で総合評価する。

テキスト

テキストは使用せず、ケーススタディとして、新聞記事、雑誌記事などを配布する。

授業概要

本講義は、日本企業の海外事業展開を 1970 年代初頭頃から 21 世紀の今日までを対象に講義します。これを通じて、日系世界企業による国際企業経営の特徴を解説します。主たる対象国は、アメリカと中国であり、日本企業のこれらの国への進出、両国での活動の実態を分析します。日本の製造企業の世界企業への転成、これを可能ならしめた要因、今日の日本の電気機械産業などに見られる国際的優位性の喪失、日系世界企業の活動の現段階、これらが議論の柱を構成します。

授業計画

第 1 回	はじめに
第 2 回	日本企業の海外進出の現状
第 3 回	日本企業の国際化の史的展開
第 4 回	日本企業のアメリカへの進出
第 5 回	日本企業と国際戦略提携
第 6 回	アメリカにおけるトヨタ自動車の国際合併事業
第 7 回	アメリカにおけるトヨタ自動車の市場支配
第 8 回	日本企業の中国への進出
第 9 回	中国における日本企業の現地生産・販売体制の形成—本田技研工業
第 10 回	世界貿易機関 (WTO) 加盟後の中国と日本企業
第 11 回	中国における日本企業の活動と課題 (1) —自動車市場
第 12 回	中国における日本企業の活動と課題 (2) —家電市場
第 13 回	中国における日本企業の活動と課題 (3) —産業財市場
第 14 回	中国における日本企業の活動の現段階
第 15 回	全体総括
第 16 回	課題レポートの提出と発表

到達目標

現代の日本の大企業による国際事業展開を学習し、日系世界企業の国際経営の実態について体系的に理解出来るようになることを目標とします。

履修上の注意

- (1) 各章・節の要点を記載したレジュメ、および資料（統計、図表など）を出席者に配布します。講義はレジュメに沿って、その内容を解説しながら進めます。
- (2) 病気などの場合を除いて、毎回欠かさず出席してください。

評価方法

レポート (70%)、講義への積極的な参加 (30%)、で評価します。

テキスト

講義形式です。テキストを使う予定はありません。私が作成したレジュメ、資料を用いて解説します。参考文献は講義中に紹介します。なお、論文などを用いた演習方式を一部組み込みます。その際は、論文等は私が配布します。

授業概要

本講義は、マーケティング論の基本的な概念を確認すること、また、身近なマーケティング事例や興味・関心のあるマーケティングについて概念や理論を活用して説明することを目標としています。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	身近なマーケティングの事例を調べる
第3回	環境分析
第4回	セグメンテーションとターゲティングとポジショニング
第5回	プロダクト
第6回	プロモーション
第7回	プライス
第8回	プレイス
第9回	推し活マーケティング
第10回	高付加価値のマーケティング
第11回	経験価値マーケティング
第12回	デジタル・マーケティング
第13回	スポーツ・マーケティング
第14回	講評
第15回	まとめ
第16回	レポートの提出

到達目標

本演習は、以下の2点を到達目標とします。

- ・マーケティング論の基本的な概念を理解し、身近なマーケティング事例を説明することができる。
- ・興味関心のある分野（テーマ）におけるマーケティングについて理論を用いて発表することができる。

履修上の注意

この講義は、少人数で行われることが予想されます。活発な議論を行うために出席は必ずするようにしてください。無断での欠席や遅刻は厳禁とします。

予習・復習

特に指定はしません。

評価方法

毎回のレポート…50点、最終レポート 50点の計 100点満点で評価する。

テキスト

- ・テキストは定めない。必要な資料は適宜配布します。

授業概要

この講義の前半（第9回まで）は戦後日本の企業経営史について、2つの側面（制度と業種）から講義する。後半（第10回以降）は、近年注目が高まっている企業の社会的責任や環境経営の歴史について概観します。本講義を通して、日本の企業経営史の特徴について理解を深めるとともに、近年の企業経営には必須となりつつある企業の社会的責任について理解を深めます。講義科目ですが、受講生による文献内容の報告など、双方向の議論を重視した授業を展開します。

授業計画

第1回	オリエンテーション（授業の進め方、評価方法の確認など）
第2回	多角化と垂直統合
第3回	企業経営を支える制度①：企業統治
第4回	企業経営を支える制度②：企業会計と企業金融
第5回	企業経営を支える制度③：企業グループ
第6回	製造業①：繊維・造船・自動車
第7回	製造業②：電気機械・化学
第8回	サービス業①：鉄道・商社
第9回	サービス業②：小売・金融
第10回	企業の社会的責任の変遷
第11回	企業の社会的責任に関する文献講読①
第12回	企業の社会的責任に関する文献講読②
第13回	環境経営の歴史
第14回	企業の環境経営に関する文献講読①
第15回	企業の環境経営に関する文献講読②
第16回	期末レポート

到達目標

- 日本経営史と近年の動向である企業の社会的責任について適切に理解できる。
- 授業内容を踏まえて、研究の前提知識として運用できる。

履修上の注意

- 特に専門知識を前提としませんが、戦後日本経営史に関する書籍を通読し、予備知識として理解しておいてください。
- 受講生によるテキスト内容の報告など、双方向の議論を重視した授業を展開しますので、授業での積極的な貢献が求められます。

予習・復習

予習：各回の講義で予定されているテーマについて、書籍やウェブサイトなどを使用し予習すること。その他、指定された文献を事前に通読しておくこと。

復習：授業で取り扱った内容を自らの言葉で説明できるように復習すること。

評価方法

期末レポート 50%、報告内容 30%、授業への取り組み・姿勢 20%

テキスト

必要に応じて適宜指示します。

授業概要

本講義では、アジア経営を理解する上で必要となるアジア経済の変遷・現状について講義する。アジア地域の成長には共通のパターンがありつつも、各国の地域性を理解していく必要があります。そこで、講義の前半（第6回まで）は共通パターンの分析を、中盤（第7回から第12回まで）は国別の分析を行います。そして後半（第13回以降）は、関連する文献を講読しながら、アジア経済に関する研究の最前線について理解を深めていきます。講義科目ですが、受講生によるテキスト内容の報告など、双方向の議論を重視した授業を展開します。

授業計画

第1回	オリエンテーション（授業の進め方の確認）
第2回	第1章：東アジアのダイナミズム
第3回	第2章：直接投資と貿易構造
第4回	第3章：地域連携と貿易・資本の自由化
第5回	第4章：開発におけるデジタル化と社会的側面
第6回	第5章：開発をめぐる政策論争と政治体制
第7回	第6章：日本経済の歩み
第8回	第7章：中国の経済発展
第9回	第8章：東アジアの先進経済
第10回	第9章：ASEANの先行経済
第11回	第10章：インドシナ半島の後発経済
第12回	第11章：南アジアの動き
第13回	関連する文献の講読・解説①
第14回	関連する文献の講読・解説②
第15回	関連する文献の講読・解説③
第16回	期末レポートの提出

到達目標

- アジア経済の成長・現状について、多様な視点から理解できる。
- テキスト内容を理解し、それを自らの言葉で発表することができる。
- アジアにおける企業経営や自身の研究との関連性について認識できる。

履修上の注意

- 受講生によるテキスト内容の報告など、双方向の議論を重視した授業を展開しますので、授業での積極的な貢献が求められます。

予習・復習

予習：各回の講義で予定されているテーマについて、テキストを一読してくること。その他、報告内容の準備を行うこと。

復習：授業で取り扱った内容を自らの言葉で説明できるように復習すること。

評価方法

期末レポート 50%、報告内容 30%、授業への取り組み・姿勢 20%

テキスト

- ・教科書名：『新・東アジアの開発経済学』
- ・著者名：大野健一・櫻井宏二郎・伊藤恵子・大橋英夫
- ・出版社名：有斐閣
- ・出版年（ISBN）：2024年（978-4-641-22229-8）

授業概要

株式会社を巡る様々な事象について、会社法の規定と実務的視点の双方からのアプローチによって講義・解説する。特に今日的な課題であるコーポレート・ガバナンス、内部統制システム、M&Aについては、具体的な事例をベースに検討します。また、会計不祥事に関連して、会計監査人と取締役・監査役との連携の在り方などの最近話題となっているテーマについても、極力、紹介します。なお、大学院生を対象としていますので、受講生の修士論文作成に関係すると思われるテーマについては、極力、重点的に取り上げるようにいたします。初回の授業の際に、各受講生に確認いたします。対面による講義方式を基本としますが、双方向的なスタイルも適宜取り入れます。

授業計画

第1回	授業の進め方、評価の仕方、会社法という法律の位置づけ
第2回	会社の種類と会社の利害関係者
第3回	会社機関設計と企業自治～株主総会や取締役等の機能～
第4回	外国会社の機関設計と特色～日本型経営との比較～
第5回	会社の資金調達的手段と長短～会社資金が不足したときの対応～
第6回	会社役員の実任追及の手段と対応～株主代表訴訟制度について考える～
第7回	企業買収（M&A）の仕組み
第8回	敵対的買収を巡る企業間の攻防～企業経営者はどのようにして対応するか～
第9回	企業買収の是非～経営者や従業員からの視点の考察～
第10回	事業譲渡と会社合併・会社分割の内容と仕組み
第11回	会社設立と設立準備実務～起業するときの手続き～
第12回	会社の倒産、会社更生、民事再生
第13回	企業不祥事と内部統制システムの整備の具体的内容
第14回	企業価値向上と企業の社会的責任～意義と企業の具体的実践～
第15回	会社を巡る最新トピックス（ESG 経営等）

到達目標

- ① 株式会社を巡る法制度を理解するとともに、企業買収や資金調達等の具体的な事象に対して、会社法の具体的な適用について、裁判例も踏まえながら理解を深めることができる
- ② 大学院生として相応しい理論的な思考を身につけることができる（リーガルマインド）

履修上の注意

特に会社法の事前知識は不要です。重要な法律用語などは都度解説をするとともに、授業を通じて、会社法と 実務への応用の理解が深まれば良いと考えています。

予習・復習

- ① 予習：次回の授業の範囲を提示しますので、教科書で該当箇所を通読しておいてください。また、該当するテーマについて、インターネットや新聞情報を確認することも有益です。
- ② 復習：レジュメに記載された課題・問題について、講義内容を振り返りながら、解答を整理することにより、知識や考え方の定着を図ります。

評価方法

期末レポート 80%、授業参加の姿勢 20%（質疑等）。なお、出席が著しく不良の場合は、評価対象外とします。

テキスト

高橋均『実務の視点から考える会社法（第2版）』中央経済社（2020年）ISBN978-4-502-35491-5
 その他、毎回、オリジナルのレジュメを配ります。参考文献は、授業中に適宜紹介します

授業概要

この授業では、グローバル化時代の財務会計の基礎理論とその応用について学ぶ。まず、会計基準の設定背景、その基礎をなす会計諸概念の体系に関する知識の習得を目的とする。また、金融商品・退職給付・減損処理・資産除去債務など、会計基準の国際的統合化の中で新たに制度化された会計処理への適用を取り上げ、最新の知識と技法の習得を目指す。また、職業会計人志望者のために、簿記検定試験や税理士・公認会計士試験の出題傾向等について適宜情報提供しながら講義する。

授業計画

第1回	企業会計制度と会計基準
第2回	会計公準と概念フレームワーク
第3回	財務会計の役割—利害調整機能と情報定提供機能の特徴分析
第4回	会計情報の意思決定有用性の意義と問題
第5回	財務諸表の構成要素（純利益と包括利益の意義など）
第6回	財務会計における認識と測定
第7回	割引キャッシュ・フロー計算の仕組みと応用
第8回	収益認識の仕組みと応用
第9回	公正価値会計
第10回	連結及び企業結合の会計
第11回	金融商品会計
第12回	リース会計
第13回	減損及び資産除去債務の会計
第14回	退職給付会計
第15回	ヘッジ及びストックオプションの会計
第16回	定期試験

到達目標

- ・修士論文作成に必要な会計理論が習得できる
- ・国際会計問題についての分析力の向上が可能
- ・グローバル化に伴う国際会計制度が理解できる

履修上の注意

- ・授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- ・授業での積極的な貢献が求められる。
- ・講義のほか、受講生による研究報告と議論も行う。

予習・復習

- ・自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- ・指示された内容に関する資料収集を心掛け、事前に読み込んでおくことが望ましい。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など）40%

テキスト

- ・開講時に指示する。
- ・必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

企業は常に成長し続けることが必要であり、そのために経営者は経営理念やビジョンを示し、戦略を策定のうえ組織内に浸透させていくことが求められる。こうした戦略を具現化するために企業は一般的に、まずは中長期および短期の計画をたて、予算を編成・執行する。管理会計は、これら戦略の具現化のために活用され、企業活動のさまざまな局面で経営者を支援し、組織構成員に影響を与えていくシステムである。

本授業ではこのような、組織内へ働きかけるマネジメント・コントロールとしての管理会計の影響システムの側面を踏まえ、管理会計の基本的な理論、伝統的な管理会計手法や応用的な枠組みを振り返ったうえで、発展的な理論としてのスループット会計、アメーバ経営、品質管理会計、環境管理会計などにも踏み込み、受講生における修士論文の作成も念頭におきながら講義する。

授業計画

第 1 回	ガイダンス, 管理会計の基礎概念・意義, 組織形態, 財務会計との違いなど
第 2 回	管理会計のアプローチ (意思決定アプローチ, 業績管理アプローチ)
第 3 回	経営計画, 直接原価計算, CVP 分析, 利益計画
第 4 回	設備投資計画・投資意思決定, ライフサイクルコストニング(LCC), 企業予算
第 5 回	事業部の業績管理, 原価管理・標準原価計算
第 6 回	活動基準原価計算(ABC)・活動基準原価管理(ABM)
第 7 回	原価企画①
第 8 回	原価企画②
第 9 回	マネジメント・コントロール, バランス・スコアカード(BSC)・戦略マップ①
第 10 回	マネジメント・コントロール, バランス・スコアカード(BSC)・戦略マップ②
第 11 回	制約理論(TOC), スループット会計
第 12 回	アメーバ経営
第 13 回	品質管理会計
第 14 回	環境管理会計, マテリアルフローコスト会計(MFCA)
第 15 回	まとめ
第 16 回	筆記試験

到達目標

管理会計の全体像を説明できる状態であることを到達目標とする。

履修上の注意

指定教科書の該当部分を予習しておくことが必要となる。受講学生が文献調査などを通じて交代で発表を行うことを想定している。

予習・復習

予習と復習は必要となる。発表のための交代での文献調査なども必要となる。

評価方法

定期試験(もしくは代替としての課題等)が 60%, 平常点が 40%で評価。平常点は受講態度, 授業関与度合いを中心に評価。

テキスト

- ・教科書名:スタンダード管理会計(第2版)
- ・著者名: 小林啓孝・伊藤嘉博・清水孝・長谷川恵一
- ・出版社名: 東洋経済新報社
- ・出版年: 2017 年

授業概要

この授業の目的は修士課程での国際会計特論の講義の水準を発展・進化させることを踏まえて、論文作成に必要な国際会計論の理論を学ぶことである。IFRS 適用には資産と負債における公正価値の評価範囲の拡大と包括利益の表示による利益概念の変化に対処することが要求される。特に、IFRS 適用企業を中心に財務諸表の事例分析を通して、IFRS と日本基準との理論的関連性を分析するとともに、IFRS 適用のあり方や日本の企業会計の国際的に対応するための手法を講義する。

授業計画

第1回	国際会計基準 (IFRS) の意義とその特徴
第2回	会計国際化の変遷と IFRS 適用の状況
第3回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(1)
第4回	日本基準の固有性と IFRS との関連性分析(2)
第5回	公正価値会計の特徴と論点整理
第6回	公正価値会計の適用上の個別論点
第7回	公正価値評価とその影響分析の争点
第8回	会計観の相違と利益概念の変化との関連性
第9回	包括利益の概念と論点整理
第10回	包括利益の導入と業績報告
第11回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(1)
第12回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(2)
第13回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(3)
第14回	IFRS 適用企業の実態分析とその検討(4)
第15回	日本における IFRS 適用の課題とその可能性の検討
第16回	定期試験

到達目標

- 博士論文の作成に必要な会計理論と制度分析に関する知識の習得できる。
- グローバル化に伴う国際会計問題についての分析力の向上できる。
- 会計制度の国際的動向や会計情報の分析能力の習得できる。

履修上の注意

- 授業の進め方は講義形式と受講生による発表を中心とする。
- 自己の論文テーマに関する予習復習に務めること。
- 授業での積極的な貢献が求められる。

予習・復習

授業の理解度を高めるために、レポートなどを通して講義内容に合わせて国際会計の関連用語を熟知させる。

評価方法

期末試験またはレポート報告 60%、授業での積極性（報告の内容及び質疑応答など）40%

テキスト

- 開講時に指示する。
- 必要に応じて関連資料を配布する。

授業概要

本講義は、公認会計士や監査法人が実施する会計監査がどのようなものであるのかを知ることが目的としている。会計監査といえば、監査人が最後に提出する短い文言の監査報告書だけが成果物であるので、そこに係れている結論だけでは、どのような監査が行われたのか、一般の人には理解が出来ない。その理解のために、『監査基準』および監査基準委員会報告等の公表物に基づいて、実際に現場に立っている公認会計士の立場から、我が国における会計監査制度の全体像を簡潔に講義する。

授業計画

第1回	会計監査総論
第2回	会計監査の歴史と監査基準について
第3回	会計監査の理論と監査人について
第4回	監査実施の全体像
第5回	監査意見と監査手続（1）
第6回	監査意見と監査手続（2）
第7回	内部統制と試査
第8回	リスク・アプローチに基づく監査（1）～リスク・アプローチの基本的な考え方
第9回	リスク・アプローチに基づく監査（2）～リスク評価とリスク対応
第10回	リスク・アプローチに基づく監査（3）～監査上の重要性等
第11回	監査計画と監査調書（1）
第12回	監査計画と監査調書（2）
第13回	他の監査人等の利用、経営者確認書
第14回	監査人の意見と監査報告書
第15回	除外事項と監査報告
第16回	筆記試験

到達目標

- ・会計監査が実際にはどのような手続きで行われているのかを理解できる
- ・会計監査がどのような社会的意義を有しているのかを理解できる。
- ・会計監査の社会的な役割について理解できる。
- ・公認会計士試験の試験科目である監査論の基本的な知識を習得できる。

履修上の注意

遅刻等について：講義中の入室は、講義の流れを悪くするので、極力避けること。

予習・復習

- ・予習については、テキストの該当ページを読む程度。
- ・復習については、講義時に配布したプリントを通読。

評価方法

試験結果 80%、平常点（態度等）20%で評価する。

テキスト

- ・講義の都度、資料等を配布予定であるので、必要なし。

授業概要

本講義は、商業簿記における記帳方法を学び、財務諸表の構成要素についての理解を深めることを目的とします。簿記は企業の経済活動を記録し、財務諸表を作成する技術です。そして、財務諸表で報告しようとする内容は会計基準等の制度の影響を受けます。この意味で、各単元では制度的なトピックも反映することになります。

授業計画

第1回	簿記の習熟度の確認，現金と金銭債権
第2回	金銭債権（手形取引）
第3回	金銭債権（償却原価法）
第4回	金銭債権（貸倒れ）
第5回	有価証券
第6回	商品売買
第7回	収益認識
第8回	有形固定資産
第9回	株主資本
第10回	外貨建取引
第11回	連結会計（資本連結）
第12回	連結会計（内部取引の相殺など）
第13回	決算整理の復習
第14回	決算整理の演習
第15回	まとめ ・ 簿記の歴史と会計制度
第16回	定期試験（レポート課題に代える場合もある）

なお、受講者の学習経験等を考慮し、受講者と相談の上、適宜範囲や内容を変更します。

到達目標

財務諸表の構成要素について、基本的な簿記処理が理解できる。

履修上の注意

概ね、上記の講義計画の内容について、基礎的内容から確認し、講義を進める予定です。ただし、各単元について、網羅的に扱うというよりは、限定的に取り扱うこととなります。

習熟度によっては相談の上、収益認識会計基準の設例などに特化した内容になることがあります。

予習・復習

これまでに学んだことのある範囲の事前復習と授業後の問題演習。

評価方法

講義に演習を含むため、定期試験（70%程度）授業における参加姿勢など（30%程度）を加味して総合的に評価します。

テキスト

1冊使用する予定です。具体的には開講時に指示します。

授業概要

コーポレートファイナンスは一つの観点から言えばキャッシュフロー管理とも言え、企業戦略に最適なキャッシュフロー戦略を立てることが企業経営で重視されています。本特論では、基本となる資本コストの定義・算出、リスクリターンのお考え方、キャッシュフローと現在価値、NPV と投資決定、資金調達的手法、ペイアウト政策の在り方について、具体的な事例によるスタディと討議を活用して理解を深め、コーポレートファイナンスの肝であるキャッシュフロー管理の高度な知見を得ることを目指します。

授業計画

第1回	コーポレートファイナンスについて
第2回	コーポレートファイナンスの事前課題の評価・討議
第3回	資本コストの定義とリスクリターンの理解
第4回	資本コスト・リスクリターンの事前課題の評価・討議
第5回	キャッシュフローについて1
第6回	キャッシュフローについて2
第7回	キャッシュフローの事前課題の評価・討議
第8回	NPV・投資決定について1
第9回	NPV・投資決定について2
第10回	NPV・投資決定の事前課題の評価・討議
第11回	資金調達について
第12回	資金調達の事前課題の評価・討議
第13回	ペイアウトについて
第14回	ペイアウトの事前課題・討議
第15回	まとめ
第16回	期末試験または期末レポート

到達目標

コーポレートファイナンスの基本的な概念を理解した上で、キャッシュフローによる企業財務の議論ができることを目標とします。

履修上の注意

事前課題を講義前に済ましておくことが前提になります。高度な数学的予備知識は不要ですが、経営財務論ⅠⅡで学ぶ内容が前提となり、エクセル等で財務関数を使って計算する必要があります。経済新聞や経済雑誌の証券・金融欄はよく目を通して、講義で積極的に発言や質問をしてください。

予習・復習

教科書により講義内容の予習をおこなってください。事前課題は必ず済ませていただかないと、講義に支障がでます。

評価方法

講義での理解度（事前課題の回答内容を確認します）30%と期末試験または期末レポート 70%

テキスト

砂川伸幸著『コーポレートファイナンス入門<第2版>』（2020年、日経文庫、日本経済新聞出版社、ISBN9784532113681、価格946円）の内容に沿って進めます。補足資料と事前課題は当方で用意します。

授業概要

本講義は、纏まった分量が求められる修士論文作成の一助とするためのものである。

修士論文を作成するためには、自分自身の実務や経験に基づく問題意識や興味と合致する論文テーマの選定が不可欠であり、さらに、その論文テーマは、先行研究や裁判例において議論される「租税法」上のどの重要論点と関わってくるのかを正確に把握した上で選定する必要がある。

また、論文テーマによっては、日本の租税法と他国の租税法との比較についても研究する必要がある。

そのため、本講義は、「租税法」の重要論点が争われた重要判例について講義を行い、これらで争われた各論点について、受講者全員で検討を行うことで、各自の修士論文のテーマの選定と、研究すべき内容の把握に資するべく行う。

また、他国の租税法との比較をする際の方法論についても入門的な講義を行う。

授業計画

第1回	修士論文作成ガイダンス
第2回	租税法主義
第3回	租税公平主義
第4回	租税法の法源、租税法の解釈と適用(租税法の解釈のあり方、借用概念の解釈)
第5回	租税法の解釈と適用(租税回避と否認の可否、租税法における信義則)
第6回	所得税の基礎①
第7回	所得税の基礎②
第8回	所得分類①
第9回	所得分類②
第10回	所得分類③
第11回	所得の計算と年度帰属①
第12回	所得の計算と年度帰属②
第13回	法人税の基礎
第14回	法人所得の意義と計算
第15回	他国の租税法との比較(比較法学)方法に係る入門的講義
第16回	期末レポート

到達目標

1. 実務や経験に基づく問題意識や興味と合致する修士論文のテーマが選定できる。
2. 修士論文のテーマに関連する重要判例について、修士論文レベルの評釈ができる。

履修上の注意

租税法既修者レベルを前提に講義を行う。

受講者は、テキストに掲載された裁判例のうち、最初の授業で自分自身が選定する裁判例についてレジюмеを作成し、授業で発表を行う。

予習・復習

予習としては、レジюме作成(自分自身の発表分担当)、レジюме対象のテキストの該当部分の熟読(発表分担当以外の受講生)。

復習は、配布資料およびテキストの授業該当部分の熟読。

評価方法

授業への積極的な参加20%、発表レジюмеの内容40%、期末レポート40%。

テキスト

金子宏・佐藤英明・増井良啓・渋谷雅弘編著『ケースブック租税法[第6版]』(2023 弘文堂)。
必要に応じて、重要論点、関連判例および先行研究について配布するレジюме。

授業概要

法人税法は実学（実務学）である。したがって、毎回の講義は、基本的には、まずは、ある項目（例えば、「収益の計上時期」以下同様。）の具体的事例を題材にして、その制度、仕組みを法人税法や通達を基に理解してもらい、次に、その項目に係る取引が会計処理を経て実務上、法人税の申告書でどのように表現されるかを体得してもらう。そして、最後に裁判例、裁決事例を題材にして、その項目に係る法令解釈、課税要件等を明らかにし、解釈上、実務上の論点等についても、使用した裁判例等の既判力、射程距離を踏まえ講義する。

修士論文作成者には、そのヒントや問題点を、税理士、あるいは企業の税務担当として活躍したい者には、各項目の体系的な整理ができるよう、加えてこれまでの国税勤務経験をもとに課税庁側の視点も踏まえたところで、各項目の実務的な理解がより深まるよう講義する。

授業計画

第1回	オリエンテーション・法人税法の概要・仕組み
第2回	収益の計上時期
第3回	原価・費用の計上時期
第4回	給与（賞与）
第5回	公租公課
第6回	減価償却・繰延資産償却・特別償却
第7回	圧縮記帳（収用・固定資産の交換・特定資産の買換え）
第8回	費途不明金・使途秘匿金・繰越欠損金
第9回	寄附金
第10回	交際費
第11回	引当金（貸倒引当金他）・貸倒損失
第12回	企業再編税制
第13回	企業再編税制
第14回	グループ法人税制、グループ通算税制
第15回	グループ通算税制、法人税法総まとめ
第16回	期末レポート

到達目標

法人税法の全体的構成及び個別の項目の理解を深めるとともにそれらに関する主要な判例の研究も進められるように法人税法の条文自体を読みこなせる（課税要件を理解する）こと、併せて独力で簡単な法人税確定申告書を作成できるようにすることが目標である。

履修上の注意

- 簿記2級程度の知識があった方が望ましい（無くても、その都度仕訳を説明するなどして、分かりやすい講義の進め方に努めたい。）。
- 前後の項目の関連性に配慮した授業計画となっており、したがって、予習復習が重要となっている。
- 電卓携行のこと。

予習・復習

- 第4回（給与等）までと第7回（圧縮記帳等）～は、各々前回授業、第5回（公租公課）は第1回（法人税法の概要・仕組み）授業の復習が必要である。
- 第12回（企業再編税制）～は、その概要について予習が必要である。

評価方法

○学期末レポート 70%、授業内レポート（小試験含む。） 15%、受講態度 15%。

テキスト

- 税法六法（法人税関係、出版社を問わない。）
- 租税判例百選（有斐閣）・第7版
- 適宜レジュメを配布する。

授業概要

所得税法は、租税法の中でも基本的な税法といえる。

本講義では、所得税法の各規定を広く確認することを通じて所得税法の仕組みを理解する。また、各規定のうち解釈及び適用について争いのあったものについて、趣旨や考え方、学説、判例にも触れて理解を深いものとする。

内容としては、授業計画のとおり広範囲のものとなるが、一つひとつの項目の学習を通じて、所得金額や税額計算に当たって生じた疑問点について法令や判例を根拠に自ら検討できるように学んでいく。

授業計画

第1回	所得税総説
第2回	所得の概念、非課税所得、納税義務
第3回	各種所得の意義と範囲(1) 利子、配当、不動産、事業所得
第4回	各種所得の意義と範囲(2) 事業、給与、退職所得
第5回	各種所得の意義と範囲(3) 譲渡、山林、一時、雑所得
第6回	収入金額と必要経費(1) 各種所得の計上時期
第7回	収入金額と必要経費(2) 家事関連費、販売費・一般管理費、減価償却
第8回	収入金額と必要経費(3) 資本的支出と修繕費、資産損失
第9回	収入金額と必要経費(4) 各種の特例
第10回	損益通算及び損失の繰越控除
第11回	所得控除と税額控除
第12回	税額計算と申告納税
第13回	非居住者の納税義務
第14回	源泉徴収制度
第15回	総まとめ
第16回	期末レポート

到達目標

- 1 各条文の理解を積み上げて、所得金額の計算から申告までを理解し、所得金額や税額の計算に当たって生じた疑問点について、法令や判例を根拠に検討できる。
- 2 一般的な決算書や確定申告書の作成ができる。

履修上の注意

- 1 第1回から第9回までは、テキスト（金子宏「租税法」）の講義該当箇所を一読した上で講義に臨んでいただきたい。
第10回以降は、その都度予習すべき内容を示す。
- 2 電卓を携行すること。

予習・復習

講義で取り上げる条文に予め目を通し、復習に際しては、繰り返し条文を読み、条文の理解に努めていただきたい。

評価方法

期末レポート 70%、受講態度 30%により評価する。

テキスト

- 税法六法（法令編及び通達編）（出版社は問わない。）
- 租税法（弘文堂・法律学講座叢書・金子宏著）最新版
- 租税判例百選（有斐閣）・最新版
- 適宜レジュメを配布する。

授業概要

相続税は民法上の「相続又は遺贈」により財産を取得した者に課される租税であり、一方、贈与税は同様に「贈与」によって財産を取得した者に課される租税である。したがって、相続税法の基本的仕組みを理解するためには、民法をはじめとする関連する私法の知識が不可欠である。

本講義では、民法を基本として相続税法の各条文の解釈に重点を置き、関連する参考判例を紹介しつつ研究の範囲を拡げ、相続税法の仕組みと内容の理解を深めることを目的とするほか、課税実務上、課税標準たる財産の時価は、財産評価基本通達の定めにより評価した価額によっていることから、同通達に定める基本的な評価方法を理解する。

授業計画

第1回	相続税法の概要・相続税の課税要件Ⅰ 課税原因
第2回	相続税の課税要件Ⅱ 納税義務者・課税財産①
第3回	相続税の課税要件Ⅲ 課税財産②
第4回	相続税の課税価格Ⅰ 課税価格の計算等
第5回	相続税の課税価格Ⅱ 小規模宅地等の特例
第6回	相続税の税額計算
第7回	贈与税の課税要件Ⅰ 課税原因・納税義務者・課税財産①
第8回	贈与税の課税要件Ⅱ 課税財産②
第9回	贈与税の課税価格と税額計算等
第10回	財産評価Ⅰ 時価と財産評価基本通達の位置付け等
第11回	財産評価Ⅱ 土地等及び非上場株式等の評価
第12回	財産評価Ⅲ 財産評価基本通達の定めによらない評価
第13回	同族会社の行為計算否認
第14回	申告と納付
第15回	事例演習

到達目標

1. 相続税法の概要を把握し、相続税及び贈与税に係る事例、裁判例を通じて各条文の理解を深めるとともに、課税実務にも対応できる。
2. 課税財産である土地等及び株式等の基本的な評価方法を理解できる。

履修上の注意

1. 相続法（民法第5編相続）に関する一般的な知識は必須。
2. 理解に資するため事例演習を行う。

予習・復習

○ 講義で配布する参考資料については、講義中に必要な箇所しか説明することができないので、説明しなかった点については必ず一読しておくこと。

評価方法

○ 課題レポート 60%、受講態度及び研究姿勢 40%

テキスト

- 税法六法（出版社は問わない。）
- 租税法（弘文堂・法律学講座叢書・金子宏著）・最新版
- 租税判例百選（有斐閣）・最新版

授業概要

消費税は、社会保障の安定財源として、その役割は益々重要な税目となっている。2023年10月には、複数税率（10%と8%）に対応するために仕入税額控除の要件が抜本的に改正され、インボイス制度が導入された。

また、高額な固定資産の取得や輸出物品販売場を舞台とした不正還付が散見されていることから、その対応策として数次の税制改正が行われており、導入時に比べ制度が複雑となっている。

本講義では、消費税の基本的な仕組みに加え、制度改正の背景や実務上の取扱いについて、重要な裁判例や裁決事例も取り上げながら講義する。

授業計画

第1回	消費税導入の経緯と我が国の税制における消費税の位置付け
第2回	課税の対象 ①課税対象となる取引の範囲と「資産の譲渡等」の意義
第3回	課税の対象 ②内外判定と国境を越えて行う電子商取引の課税関係
第4回	非課税取引
第5回	輸出免税取引 輸出免税の概要と今後の課題
第6回	納税義務者と高額特定資産等を取得した場合の納税義務免除の制限
第7回	資産の譲渡等の時期（納税義務の成立時期）と課税期間
第8回	課税標準及び税率（軽減税率制度を含む。）
第9回	仕入税額控除 ①仕入税額控除制度の趣旨と課税仕入れの意義・範囲
第10回	仕入税額控除 ②インボイス制度
第11回	仕入税額控除 ③インボイス制度、仕入控除税額の調整
第12回	簡易課税制度
第13回	国・地方公共団体等に係る仕入控除税額の特例計算
第14回	申告・納付・届出等、総額表示義務、消費税額及び地方消費税額の計算
第15回	まとめ（誤りやすい実務事例の検討等）
第16回	課題レポート

到達目標

消費税について、実務上の取扱いにとどまらず、制度の趣旨・背景を理解するとともに、消費税のあるべき方向から将来的な課題を考えることができる。また、基本的な知識を身に付け、それに基づき実際の事例を解決することができる。

履修上の注意

- 1 講義終了後に、その都度講義内容は資料を見返して、理解を深めてほしい。
- 2 理解の程度を把握するために適宜、事例等について各自の意見を求めることがある。
- 3 必要に応じ、電卓を携行する（随時指示する。）。

予習・復習

テキスト（租税法）の講義該当部分について、予習してくること。

評価方法

期末試験に代えて、課題レポート（70点満点）を課す。課題レポートでは、消費税の基本的な仕組みや講義した内容を理解しているかどうかを判定する。

このほか、履修態度等を加味した平常点（30点）と合わせて100点満点とする。

テキスト

- 税法六法及び通達集
- 適宜レジュメ等を配付する。

授業概要

国際租税法とは、クロスボーダー取引等に係る課税、すなわち国際課税、に関する法のことを意味するが、実際に国際租税法という名前の法律があるわけではなく、国際的二重課税を排除するための各国の租税法上の制度、国家間の取り決めである条約等の総称である。また、現代においては、国際的二重課税の排除だけではなく、国際的租税回避行為、すなわち国際的二重非課税を排除する必要性も生じ、OECDを中心に、新たな仕組み作りも行われ、その重要性はますます大きいものとなっている。

本講義を受講することで、国際租税法という視点で租税法各論点を学び、ソース・ルール等の国際租税法の基礎概念を検討し、そして租税法の根幹の一つともいえる課税根拠等についての思考力を養うことは、国際租税法を修士論文テーマに選定される方にとってはもちろん、他のテーマを選定される方にとっても、修士論文のロジックを構築するに際して有用な機会となろう。

授業計画

第 1 回	国際租税法の概要
第 2 回	租税条約①
第 3 回	租税条約②
第 4 回	国内源泉所得①
第 5 回	国内源泉所得②
第 6 回	投資所得①
第 7 回	投資所得②
第 8 回	事業所得①
第 9 回	事業所得②
第 10 回	外国税額控除①
第 11 回	外国税額控除②
第 12 回	外国子会社①
第 13 回	移転価格税制①
第 14 回	移転価格税制②
第 15 回	ハイブリッド・エンティティ
第 16 回	期末レポート

到達目標

1. 国際課税法の基礎概念を理解できる
2. 国際課税法において、現在どのような課題が存在するかについて把握できる

履修上の注意

租税法既修者レベルを前提に講義を行う。

予習・復習

予習は、テキストの該当部分の熟読。

復習は、配布資料およびテキストの授業該当部分の熟読。

評価方法

授業への積極的な参加40%、期末レポート60%。

テキスト

- 教科書名：『国際租税法[第4版]』
- 著者名：増井良啓・宮崎裕子
- 出版社名：東京大学出版会
- 出版年 (ISBN)：令和6年

授業概要

環境会計（Environmental Accounting）とは、企業や組織が環境に対する経済的な影響や資源利用を定量的に評価し、経営判断や持続可能性の向上に役立てる会計手法である。企業は環境への貢献や負荷を会計上で計測し、環境に対する経済的な要素を財務報告に取り込むことで、効果的な環境経営を実現するためのツールとして広く活用している。授業では、環境会計の理論を考察し、代表的な論文を取り上げながら、その現状や課題について理解を深められるよう講義する。

授業計画

第1回	講義の狙い、全体像、進め方、評価方法および受講上の注意点
第2回	Grayらのグリーンアカウンティング
第3回	D.B.ルーベンスタインの学説と環境会計
第4回	環境会計と付加価値計算書
第5回	環境会計とサステナビリティ
第6回	環境会計と環境コスト
第7回	環境会計の視点：証券市場か市民社会か
第8回	経営分析における環境会計
第9回	環境会計ガイドラインと環境省の取り組み
第10回	環境会計における効果の考え方
第11回	環境会計と環境パフォーマンス評価
第12回	環境会計ガイドラインの改訂と課題
第13回	「環境」会計と環境「会計」の違いと融合
第14回	環境会計と環境報告の統合
第15回	諸外国における環境会計の導入と展開

到達目標

- ・環境会計の専門知識を理解し、関連分野の現状、特徴や諸課題について説明できる。
- ・環境会計の専門知識を応用し、自らの視野と可能性を広げることができる。

履修上の注意

- ・授業計画（テーマや順番など）は変更になることがある。
- ・授業開始から30分までは遅刻として受講を認める。（遅延証明や体調不良等の証明がある場合を除く）
- ・遅刻3回で1回の欠席扱いとし、無断欠席が累計6回以上の場合、単位付与は行わない。

予習・復習

- ・予習：授業計画に沿って、関連論文等を活用して適宜に予習しましょう。
- ・復習：授業終了後、関連論文等を再読するなど理解を深めましょう。

評価方法

- ・平常点 100%

テキスト

指定教科書はありません。毎回、参考資料等を配布します。

授業概要

この授業では、主にコーポレート・ファイナンスに関連した諸問題を講義する。コーポレート・ファイナンスの基礎理論であるモジリアーニ・ミラー理論においては、資金調達の違いが企業価値に影響を及ぼすことはなく、また投資の決定と資金調達の問題はそれぞれ独立に決定されます。しかしながら、現実の世界では、企業の投資の決定と投資に必要な資金の調達に関する問題とは密接に関連しています。この授業では、このような MM 理論と現実との違いに注意を払いながら、コーポレート・ファイナンスの問題を多面的に考察します。また、各種のコーポレート・ガバナンスのテーマやメインバンク論、金融危機および金融規制、そして ESG の問題などにもアプローチします。

授業計画

第1回	オリエンテーション：この授業で学ぶこと
第2回	モジリアーニ・ミラー理論
第3回	最適資本構成の理論
第4回	コーポレート・ガバナンス論の系譜
第5回	コーポレート・ガバナンス論の発展
第6回	CSRとESG
第7回	メインバンクの機能
第8回	系列の機能に関する実証分析
第9回	東アジアのファミリービジネス
第10回	法とファイナンス
第11回	バブル崩壊後の日本の金融危機
第12回	銀行のコーポレート・ガバナンス
第13回	金融システムとコーポレート・ガバナンスの展望
第14回	アメリカ発の世界金融危機
第15回	グローバルな金融規制
第16回	期末レポートの提出

到達目標

- 企業金融、コーポレート・ガバナンス、金融危機、金融規制などの分野で、理論や実証分析に関する代表的な先行研究を理解できる。
- 同分野で、オリジナルな分析ができる。

履修上の注意

受講生は、企業金融論、金融システム論、銀行論、計量経済学などの科目の学部レベルの知識を備えていることが必要です。また、この授業では講義と受講生による英語論文の内容報告のハイブリッド形式で進める予定です。

予習・復習

各回の講義で予定されているテーマの概要を事前に理解するとともに、各回の授業終了後に内容を復習することを求めます。

評価方法

期末レポート 50%、報告内容 30%、授業への取り組み姿勢 20%。

テキスト

授業で取り上げる資料や文献等を、その都度紹介、配布します。

授業概要

経済のグローバル化の進展に伴い、世界経済の動向は世界の金融資本市場によって大きく左右されるようになりました。このような状況にあって、どのような原則に基づいて資本が移動するのかの正確な理解が、世界経済の動向を分析、予測するために必要です。したがって、本特論では、国際資本市場の仕組みを理解するために必要な理論的枠組みと基礎的諸概念について講義します。アセット・マーケット・アプローチに基づいて、外国為替市場を中心に考究します。文献輪読による指導を行います。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	開放経済における国民所得勘定
第3回	国際収支の均衡
第4回	為替レートと国際取引
第5回	外国為替市場：直物為替レート
第6回	外国為替市場：先物為替レート
第7回	外貨建て資産への需要
第8回	外国為替市場における均衡
第9回	利子率変化が現在の為替レートに及ぼす影響
第10回	先物為替レートとカバー付き利子平価
第11回	個人による貨幣需要
第12回	均衡利子率：貨幣供給と貨幣需要の相互作用
第13回	短期における貨幣供給と為替レート
第14回	為替レートのオーバーシュート
第15回	購買力平価（PPP）
第16回	購買力平価（PPP）に基づく長期的為替レートモデル

到達目標

- ・国際経済学の基礎理論を踏まえ、日本を含む国際経済の現状と課題を的確に把握し、自分の主張を述べることができる。
- ・世界経済の動向を分析、予測することができる。

履修上の注意

この授業は、PBL（Project Based Learning）を積極的に用い、学生間での意見交換を重視し参加型の講義を行う。また、通常の学内教室以外で授業（学外授業）を実施する場合がある。なお、遅刻3回で欠席1回分にカウントする。授業において特別講師等を外部から招聘する場合がある。必要なら学部レベルから丁寧に解説をしていくので、基礎知識がなくてもやる気さえあれば十分な能力を身につけられるように指導します。

評価方法

課題レポート 100%で評価する。また、毎回出席を取る。

テキスト

- ・教科書名：クルーグマン国際経済学：理論と政策（下巻：金融編）
- ・著者名：P.R.クルーグマン、M.オブストフェルド、M.J.メリッツ著；山形浩生、守岡桜訳
- ・出版社名：丸善出版
- ・出版年月：2017年1月 ISBN：9784621300589 本体 5000円＋税

授業概要

貨幣論の学説史、貨幣論の本質と機能に関する理論、国際通貨制度の歴史、現代の通貨問題についての内容を、現代の貨幣理論において基礎となる形成から発展までの理論史を中心に、貨幣について深く、学問的に考察できるように指導する。講義は、講義形式とディスカッションと組み合わせた形で行う。また、特定のテーマについての報告も求める。

授業計画

第1回	ガイダンス（この科目で学ぶこと、履修するうえでのルール説明）
第2回	（テキスト第1章）貨幣の価値(1)
第3回	（テキスト第1章）貨幣の価値(2)
第4回	（テキスト第2章）貨幣の変容
第5回	（テキスト第3章）貨幣数量説
第6回	（テキスト第4章）貨幣の管理
第7回	（テキスト第6章）世界貨幣と基軸通貨(1)
第8回	（テキスト第6章）世界貨幣と基軸通貨(2)
第9回	（テキスト第7章）変動為替相場制(1)
第10回	（テキスト第7章）変動為替相場制(2)
第11回	（テキスト第8章）最適通貨圏とユーロ(1)
第12回	（テキスト第8章）最適通貨圏とユーロ(2)
第13回	（テキスト第9章）アジア通貨危機(1)
第14回	（テキスト第9章）アジア通貨危機(2)
第15回	（テキスト第10章）国際通貨の2050年への展望
第16回	期末試験（口頭試問等）

到達目標

貨幣論を修士論文の課題とする、または貨幣論に関心を持つ大学院博士前期課程の院生が、授業を通して学術論文を理解する学力を養い、貨幣論の抱えるテーマを学説史から理解することを目標とする。また、貨幣と市場経済の関係を巨視的に理解する。

履修上の注意

自分の問題・関心をもって授業に臨む。自分のテーマを報告する機会を設ける。各授業回ともディスカッションをする。自ら進んで学ぶ姿勢が必要である。

予習・復習

- (1) 授業計画にしたがい、自らレジュメを作成し、事前に授業内容を必要活十分に把握する。
- (2) 履修生が作成したレジュメを用いて授業を進めるため、必要かつ十分な予習が必要である。
- (3) テキストや指示した参考文献等を自ら進んで読み、常に自身の研究・論文の構想を計画する。

評価方法

- ①授業への取り組み（60%）、②レポートおよび口頭試問による評価（40%）で評価する。

テキスト

- ・教科書名：『貨幣理論の現代的課題—国際通貨の現状と展望』
- ・著者名：奥山忠信
- ・出版社名：社会評論社
- ・出版年（ISBN）：2013年（978-7845-1821-0）

授業概要

銀行で、いわゆる国債窓販やバンクディーリングの商品開発企画（1980年代）、証券信託（ファンドトラスト）や年金基金信託の運用マネージ業務（1980年代）、銀行と証券会社で株式公開支援やM&A仲介業務（1990年代、2000年代）等を経験したことを活かして、個別の事例を具体的に掘り下げていく。具体的には、講師は、公認会計士、証券アナリスト、証券外務員などの資格を保有し、銀行と証券会社に勤務したので、いわゆる金融商品会計や税制についても精通している。なお、税理士資格取得を目標とする受講生が履修する場合、各回の授業に、証券税制が、証券市場にどのような影響を与えたかについても、触れていくこととする。

授業計画

第1回	証券市場と国民経済
第2回	日本の証券市場の歴史
第3回	株式発行市場
第4回	株式流通市場
第5回	公社債発行市場
第6回	公社債流通市場
第7回	デリバティブ市場
第8回	証券化商品市場
第9回	金融商品取引所等
第10回	証券取引の行為規制と証券行政
第11回	金融商品取引業（証券業）
第12回	資産運用業
第13回	投資信託
第14回	情報開示制度
第15回	証券税制
第16回	総括と期末レポート

到達目標

銀行（間接金融）と証券（直接金融）の違いを理解できる。
世の中で証券化が急速に発展していったが、その功罪を理解でき、個々人の貯蓄や投資判断にも活用することができる。

履修上の注意

ある程度、金融や証券の知識があった方が良いが、なくても理解できるような授業とする。具体的には、大学院は履修者が少ないのが通例であり、いわゆる演習形式の授業運営を行う。

予習・復習

予習は、後述のテキストを授業テーマに合わせて、事前に読んでおいてほしい。また、疑問点をみつけて、自分なりの考えをまとめておいて、授業での討論にそなえてください。

評価方法

毎回の演習形式での質疑応答やミニテスト（合計50%）と期末レポート（50%）を総合評価。

テキスト

図説日本の証券市場 2024年版。書店で購入のほか、全文を日本証券経済研究所のHPからPDFで入手可。

授業概要

リスクマネジメントの基本概念を理解し、実務での適用を可能とすることを目的とする。基本的なフレームワークは COSO の ERM を採用するが、リスクという点で最も典型的な金融リスクを最初に検討し、次いで、より広範囲の ERM について検討する。特に、リスクに対するコントロールのセルフアセスメントの実務を検討する事で、実務への適用ができる素地を育成する。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	金融リスクマネジメント概説
第3回	COSO の ERM フレームワーク (リスクの概念、評価の方法)
第4回	リスクの洗い出し
第5回	リスクアセスメントの方法
第6回	リスクアセスメント1
第7回	リスクコントロール1
第8回	学生からのフィードバック
第9回	リスクアセスメント2
第10回	リスクコントロール2
第11回	話題のリスク1
第12回	話題のリスク2
第13回	リスク選好再考
第14回	リスクマネジメントで何を達成するか?
第15回	全体総括
第16回	予備

到達目標

リスクマネジメントの基本的な考え方を理解するとともに、リスクアセスメント、リスクコントロールの評価を具体的に実施するための知見を獲得することを目標とする。

履修上の注意

講義では、学生の積極的な貢献を期待している。特にリスクアセスメントやリスクコントロールの評価などは学生自身の作業により理解が進む点に注意する。

予習・復習

フレームワークは基本的に COSO の ERM を利用するので事前に参照する事ができる。
<https://www.coso.org/guidance-erm> から参照できる。

評価方法

講義への貢献 (50%) とレポート (50%) を同じ比重で評価する。

テキスト

無し

授業概要

〈研究指導 I：1 年次〉 主に論文作成に必要な基本的能力の習得および修士論文テーマの絞り込みを行う。前半は、ヘルスケアサービスに関するテキストを使用し、輪読形式で発表および検討を行う。ヘルスケアサービス・マネジメントに必要な考え方と問題点について議論し理解を深められるよう指導する。後半は受講者個々人のテーマの絞り込みや先行研究を行う。

〈研究指導 II：2 年次〉 論文執筆計画から完成までの一連のプロセスを遂行する。受講者個々人の研究テーマに添った研究アプローチに基づき、論文作成を指導する。文献収集および文献検討、論文執筆等、それぞれに関するスキルを身に付ける。

授業計画

〈研究指導 I〉		〈研究指導 II〉	
第 1 回	ガイダンスとフリーディスカッション	第 1 回	1 年次の振り返り
第 2 回	ヘルスケアサービスについてのディスカッション	第 2 回	論文作成前の課題の絞り込みと設定
第 3 回	ヘルスケアサービス・マネジメントについてのディスカッション	第 3 回	文献収集①
第 4 回	テキスト輪読① Part I-①	第 4 回	文献収集②
第 5 回	テキスト輪読② Part I-②	第 5 回	文献収集③
第 6 回	テキスト輪読③ Part I-③	第 6 回	文献研究発表
第 7 回	テキスト輪読④ Part II-①	第 7 回	論文テーマの設定①
第 8 回	テキスト輪読⑤ Part II-②	第 8 回	論文テーマの設定②
第 9 回	テキスト輪読⑥ Part II-③	第 9 回	論文テーマの設定③
第 10 回	テキスト輪読⑦ Part III-①	第 10 回	論文テーマの決定①
第 11 回	テキスト輪読⑧ Part III-②	第 11 回	論文テーマの決定②
第 12 回	研究方法の検討	第 12 回	研究目的の絞り込み①
第 13 回	質的研究と量的研究	第 13 回	研究目的の絞り込み②
第 14 回	実証研究と理論研究	第 14 回	研究方法の決定①
第 15 回	仮説の有無	第 15 回	研究方法の決定②
第 16 回	期末レポート試験	第 16 回	期末レポート試験 (中間とりまとめ)
第 17 回	エビデンス、クリティカル・シンキング	第 17 回	論文作成①
第 18 回	社会科学分野研究の特徴について	第 18 回	論文作成②
第 19 回	課題の抽出について	第 19 回	論文作成③
第 20 回	研究目的の明確化	第 20 回	論文作成④
第 21 回	研究テーマの設定①	第 21 回	論文作成⑤
第 22 回	研究テーマの設定②	第 22 回	論文作成⑥
第 23 回	研究テーマの設定③	第 23 回	論文作成⑦
第 24 回	研究テーマの設定④	第 24 回	論文作成⑧
第 25 回	文献研究①	第 25 回	論文作成⑨
第 26 回	文献研究②	第 26 回	論文作成⑩
第 27 回	文献研究③	第 27 回	論旨作成①
第 28 回	文献研究④	第 28 回	論旨作成②
第 29 回	文献研究⑤	第 29 回	論旨作成③
第 30 回	研究内容発表	第 30 回	総括①
第 31 回	まとめ	第 31 回	総括②
第 32 回	期末レポート試験	第 32 回	期末試験 論文発表会

到達目標

〈研究指導 I〉

・研究テーマの絞り込みができる。／・文献収集や文献検討ができる。／・英文文献研究ができる。

〈研究指導 II〉

・論文執筆までの一連のプロセスが理解できる。／・論文執筆のために必要なスキルが身に付けられる。／・論文を完成できる。

履修上の注意

〈研究指導 I〉 テーマの絞り込みに関しては、じっくり考え、悩んで、よく検討するようにしてください。予習・復習各 90 分程度。

〈研究指導 II〉 できるだけ計画的に進められるよう心がけてください。予習・復習各 90 分程度。

評価方法

〈研究指導 I〉 授業中の報告、論文への積極的取り組み 50%、期末レポート試験 50%で評価する。

〈研究指導 II〉 論文の完成度に応じて評価する。論文執筆 100%。

テキスト

〈研究指導 I〉 Ann Scheck McAlearney, Anthony R. Kovner, Health Services Management-A Case Study Approach, AUPHA

〈研究指導 II〉 受講生の研究テーマに応じて授業中に適宜指示する。

授業概要

＜研究指導 I＞ 私の専門分野は、金融システム、コーポレート・ファイナンス、コーポレート・ガバナンス、ESG などの理論および実証研究であり、それらの分野における論文作成に必要とされる専門的な知識および実証分析手法を修得するとともに、最終的には問題意識を深め、かつ絞り込みます。

＜研究指導 II＞ 修士論文の執筆に関する指導を行います。とりわけ重要な点は、第 1 に論文の着眼点や目的をはっきりさせ自分の論文のオリジナルな貢献を明確化すること、第 2 に先行研究のサーベイを過不足なく実施すること、第 3 に適切な仮説を設定し実証分析を丁寧に進めること、そして最後に得られた結論を適切にまとめることです。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	ガイダンス：研究指導の概要	第 1 回	ガイダンス：修士論文完成までのプロセス確認
第 2 回	先行研究の収集	第 2 回	修士論文計画書の再検討
第 3 回	金融システムに関する先行研究の読解	第 3 回	先行研究サーベイの報告
第 4 回	同上	第 4 回	同上
第 5 回	同上	第 5 回	同上
第 6 回	同上	第 6 回	同上
第 7 回	コーポレート・ファイナンスに関する先行研究の読解	第 7 回	同上
第 8 回	同上	第 8 回	同上
第 9 回	同上	第 9 回	仮説と実証モデルの検討
第 10 回	同上	第 10 回	同上
第 11 回	同上	第 11 回	同上
第 12 回	コーポレート・ガバナンスに関する先行研究の読解	第 12 回	同上
第 13 回	同上	第 13 回	データセット構築に関する報告
第 14 回	同上	第 14 回	同上
第 15 回	同上	第 15 回	同上
第 16 回	同上	第 16 回	実証結果報告
第 17 回	同上	第 17 回	実証モデルの再検討
第 18 回	ESG に関する先行研究の読解	第 18 回	実証結果報告
第 19 回	同上	第 19 回	実証モデルの再検討
第 20 回	同上	第 20 回	実証結果報告
第 21 回	同上	第 21 回	実証モデルの再検討
第 22 回	実証分析手法の修得	第 22 回	修士論文 1 次稿の完成と報告
第 23 回	同上	第 23 回	修士論文 1 次稿の問題点の洗い出しと修正
第 24 回	同上	第 24 回	同上
第 25 回	同上	第 25 回	同上
第 26 回	修士論文計画書の検討	第 26 回	修士論文 2 次稿の完成と報告
第 27 回	同上	第 27 回	修士論文 2 次稿の問題点の洗い出しと修正
第 28 回	同上	第 28 回	同上
第 29 回	修士論文計画書の完成	第 29 回	修士論文最終版の完成と報告
第 30 回	第 1 年次のまとめ	第 30 回	同上

到達目標

- 最終的にアカデミックに重要な貢献を含んだ学術論文を執筆することができる。

履修上の注意

修士論文を執筆するというのは、大変な労力を要しますので、十分な覚悟を持って取り組んでください。

評価方法

各回の報告と論文の進捗状況 50%、修士論文の内容 50%。

テキスト

必要な文献は、適宜指示します。

授業概要

＜研究指導 I＞修士論文のテーマ選定のため、関心を持つテーマに係る学術書・裁判例・先行研究を読み込み、また文献や裁判例の探し方や読み方について指導する。

＜研究指導 II＞選定されたテーマについて、追加すべき文献や裁判例の相談をしながら、学術論文作成ルールに則って、修士論文を完成させるべく指導する。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	ガイダンス	第 1 回	修士論文の概要の再チェック
第 2 回	問題意識の抽出とテーマ選定イメージ作り	第 2 回	不足する論点・文献・裁判例の洗い出し
第 3 回	テーマに係る文献の読み込み	第 3 回	不足する論点・文献・裁判例の読み込み
第 4 回	テーマに係る文献の読み込み	第 4 回	不足する論点・文献・裁判例の読み込み
第 5 回	テーマに係る文献の読み込み	第 5 回	修士論文の概要の修正指導
第 6 回	テーマに係る文献の読み込み	第 6 回	中間報告会の準備指導
第 7 回	テーマに係る文献の読み込み	第 7 回	中間報告会の準備指導
第 8 回	テーマに係る裁判例の読み込み	第 8 回	中間報告会の準備指導
第 9 回	テーマに係る裁判例の読み込み	第 9 回	中間報告会
第 10 回	テーマに係る裁判例の読み込み	第 10 回	中間報告会での指摘事項等再確認
第 11 回	テーマに係る裁判例の読み込み	第 11 回	修士論文の構成検討
第 12 回	今まで検討した内容の整理	第 12 回	修士論文の構成検討
第 13 回	テーマの絞り込み	第 13 回	修士論文の執筆指導
第 14 回	追加すべき文献・裁判例の読み込み	第 14 回	修士論文の執筆指導
第 15 回	追加すべき文献・裁判例の読み込み	第 15 回	修士論文の執筆指導
第 16 回	追加すべき文献・裁判例の読み込み	第 16 回	修士論文の執筆指導
第 17 回	追加すべき文献・裁判例の読み込み	第 17 回	修士論文の執筆指導
第 18 回	追加すべき文献・裁判例の読み込み	第 18 回	修士論文の執筆指導
第 19 回	追加すべき文献・裁判例の読み込み	第 19 回	修士論文の執筆指導
第 20 回	論文のロジックのイメージ作り	第 20 回	修士論文の執筆指導
第 21 回	論文のロジックのイメージ作り	第 21 回	修士論文の執筆指導
第 22 回	学術論文作成ルール、マナー等の確認	第 22 回	修士論文の執筆指導
第 23 回	修士論文の全体像と結論の方向性検討	第 23 回	修士論文の執筆指導
第 24 回	修士論文の全体像と結論の方向性検討	第 24 回	修士論文の執筆指導
第 25 回	修士論文の概要作成指導	第 25 回	修士論文の執筆指導
第 26 回	修士論文の概要作成指導	第 26 回	修士論文の執筆指導
第 27 回	修士論文の概要作成指導	第 27 回	修士論文の執筆指導
第 28 回	修士論文の概要作成指導	第 28 回	修士論文の執筆指導
第 29 回	修士論文の概要報告指導	第 29 回	まとめ
第 30 回	まとめ	第 30 回	まとめ

到達目標

＜研究指導 I＞問題意識と興味を十分反映した修士論文テーマと、必要な参考文献・裁判例を把握できる。

これらが達成できれば、最終年度における論文執筆を順調に行うことができるはずである。

＜研究指導 II＞研究指導 I で作成した論文概要の肉付けを、学術論文作成ルールに則って行い、修士論文を完成させる。

履修上の注意

修士論文は学術研究の成果であり、自分自身で文献を探し、裁判例を解釈し、ロジックを組み立てていく、自主性を持った研究姿勢が重要であり、その気構えが求められる。

評価方法

研究指導 I は論文の概要の内容と研究に取り組む姿勢により、研究指導 II は修士論文の内容により評価する。

テキスト

指定なし。必要都度、教員が配布する。

授業概要

佐藤メソッドという独自の内容・方法により、1対1で個別指導を行う。この科目においては、教員が、一定の報告書に基づいて、論文の進行管理を行う（下記「履修上の注意」を参照。）。教員から効果的、効率的に指導を受けるには、論文に、意味のある進捗があることが前提であるので、日々着実に、しっかりと進めて臨むことが、必要である。

授業計画

第 1 回	論理展開の再検討：報告・指導	第 16 回	質・内容の向上（第 2 章）報告・指導
第 2 回	論理展開の再検討：報告・指導	第 17 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 3 回	論理展開の再検討：報告・指導	第 18 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 4 回	論理展開の再検討：報告・指導	第 19 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 5 回	質・内容の向上（序章）報告・指導	第 20 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 6 回	質・内容の向上（序章）報告・指導	第 21 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 7 回	質・内容の向上（第 1 章）報告・指導	第 22 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 8 回	質・内容の向上（第 1 章）報告・指導	第 23 回	質・内容の向上（第 3 章）報告・指導
第 9 回	質・内容の向上（第 1 章）報告・指導	第 24 回	質・内容の向上（第 4 章）報告・指導
第 10 回	質・内容の向上（第 1 章）報告・指導	第 25 回	質・内容の向上（第 4 章）報告・指導
第 11 回	質・内容の向上（第 2 章）報告・指導	第 26 回	質・内容の向上（第 4 章）報告・指導
第 12 回	質・内容の向上（第 2 章）報告・指導	第 27 回	質・内容の向上（終章）報告・指導
第 13 回	質・内容の向上（第 2 章）報告・指導	第 28 回	質・内容の向上（終章）報告・指導
第 14 回	質・内容の向上（第 2 章）報告・指導	第 29 回	まとめ（最終試験準備）
第 15 回	質・内容の向上（第 2 章）報告・指導	第 30 回	まとめ（最終試験準備）

到達目標

研究指導Ⅰの1年間で、ほぼ、粗々の論文が全体として出来上がることを目標とする。研究指導Ⅱでは、論理の崩れの再チェック（木に竹を接いだようになっていないか）等の実施、各章の補強作業（追加的資料収集を含む）を積極的に進め、最後の3か月はテニヲハのみの修正だけで終われる余裕のある進捗の確保をすること。こうした地道で着実な努力によって、「学ぶ楽しさ、知るよろこび」を実感できるはずである。

履修上の注意

まず、論文テーマを決定する。未決定の者は、当初3か月内で三点セット（事案概要・三者比較表・論者比較表）で決定する。研究指導Ⅰ・Ⅱを通じて、可能な限り、四点セット（説明・質問等メモ、要旨、本文、論理展開図）の作成を通じて、指導を受ける。テキストは暗記するぐらいに、何度も熟読して臨むこと。なお、履修生は社会人院生が含まれるので、この科目も含め、修士論文関係科目を、基本的に、オンラインで講義・指導する。

評価方法

基本的に、研究の進捗と深度（発表内容の質の高さを含む）に100%配分で評価する。

テキスト

独自テキストを配付する。参考書は、基本的に、金子宏著「租税法（第24版）」（弘文堂、2021年）とする。

授業概要

研究指導 I：1 年次には、修士論文作成のための基礎的知識と方法論を指導する。また、大企業、中小企業、地域企業というキーワードに基づく企業活動の実態が理解できるようにする。論文のテーマでは、受講生個々に応じた指導を行う。

研究指導 II：2 年次には、1 年時に設定した研究テーマに沿った論文作成のための指導を行う。論文作成にあたっては、様々な視点から修正を行い、より水準の高い内容となるよう指導する。

授業計画

<研究指導 I>		<研究指導 II>	
第1回	オリエンテーション	第1回	論文のテーマと構成の確認
第2回	受講生の問題意識の確認	第2回	論文構成の検討と議論
第3回	研究テーマに関する議論	第3回	論文構成の検討と議論
第4回	研究テーマに関する議論	第4回	論文構成の検討と議論
第5回	研究テーマに関する議論	第5回	中間報告の準備
第6回	研究テーマに関する先行研究	第6回	中間報告の準備
第7回	研究テーマに関する先行研究	第7回	中間報告の見直し
第8回	研究テーマに関する先行研究	第8回	論文構成の再検討と議論
第9回	基本文献の収集と報告	第9回	論文構成の再検討と議論
第10回	基本文献の収集と報告	第10回	論文構成の再検討と議論
第11回	基本文献の収集と報告	第11回	論文構成の再検討と議論
第12回	日本産業と大企業	第12回	論文構成の再検討と議論
第13回	日本産業と大企業	第13回	論文構成の再検討と議論
第14回	日本産業と地域企業	第14回	論文構成の再検討と議論
第15回	日本産業と地域企業	第15回	論文構成の再検討と議論
第16回	日本産業と中小企業	第16回	中間報告の準備
第17回	日本産業と中小企業	第17回	中間報告の準備
第18回	日本産業の海外生産	第18回	中間報告の準備
第19回	日本産業と大企業	第19回	報告の反省と課題の抽出
第20回	研究テーマと先行研究の検討	第20回	報告の反省と課題の抽出
第21回	研究テーマと先行研究の検討	第21回	論文の構成と報告
第22回	研究テーマと先行研究の検討	第22回	論文の構成と報告
第23回	研究テーマと先行研究の検討	第23回	論文の構成と報告
第24回	論文構成の検討と議論	第24回	論文の構成と報告
第25回	論文構成の検討と議論	第25回	論文の構成と報告
第26回	論文構成の検討と議論	第26回	論文の構成と報告
第27回	論文構成の検討	第27回	論文の構成と報告
第28回	論文構成の検討	第28回	論文の構成と報告
第29回	論文構成の検討	第29回	最終チェック
第30回	論文の内容を報告	第30回	最終チェックと今後の研究課題の再確認

到達目標

・大企業、地域企業、中小企業を学ぶことで、国内外の経済社会の変化と今後を展望できる能力を身に付けることを目標とする。

履修上の注意

・研究指導 I：研究テーマの文献などを理解すると共に、論点を明確にするという意識を持つこと。
 ・研究指導 II：論文構成における論理展開を繰り返し検討すると共に、報告、議論を重ねることが重要である。

評価方法

・研究指導 I：
 1) レポート及び課題 (60%) 2) 報告 (30%) 3) 授業貢献度 (10%) により総合的に評価する。
 ・研究指導 II：
 1) 修士論文及び課題 (60%) 2) 報告 (30%) 3) 研究姿勢 (10%) により総合的に評価する。

テキスト

・研究指導 I：受講生の研究テーマの調査・分析の進捗度に応じて、授業中に指示する。
 ・研究指導 II：受講生の論文作成の進捗度に応じて、授業中に指示する。

授業概要

修士論文の作成に向けた研究指導を行う。研究テーマの確定、研究の基礎となる基本的なテキストの理解、先行文献の収集、研究論文の構成、研究論文の作成について指導。受講生が選定した論文テーマと各自の研究フレームワークに沿った研究指導を行う。特に、論文の独創性と分析力が論文に反映できるように指導する。

授業計画

<研究指導 I >		<研究指導 II >	
第1回	ガイダンス：国際会計の意義と動向	第1回	論文の章立ての詳細化(1)
第2回	研究テーマの選定のための文献収集(1)	第2回	論文の章立ての詳細化(2)
第3回	研究テーマの選定のための文献収集(2)	第3回	論文の章立ての詳細化(3)
第4回	研究テーマの選定のための文献収集(3)	第4回	中間報告会への準備(1)
第5回	研究テーマの選定とロードマップの作成	第5回	中間報告会への準備(2)
第6回	基本的な文献の輪読と理解(1)	第6回	中間報告会への準備(3)
第7回	基本的な文献の輪読と理解(2)	第7回	中間報告会の問題点の整理と反省
第8回	基本的な文献の輪読と理解(3)	第8回	論文作成の見直し(1)
第9回	基本的な文献の輪読と理解(4)	第9回	論文作成の見直し(2)
第10回	基本的な文献の輪読と理解(5)	第10回	論文作成の見直し(3)
第11回	基本的な文献の輪読と理解(6)	第11回	論文作成の見直し(4)
第12回	基本的な文献の輪読と理解(7)	第12回	論文作成の見直し(5)
第13回	基本的な文献の輪読と理解(8)	第13回	論文作成の見直し(6)
第14回	基本的な文献の輪読と理解(9)	第14回	論文の作成経過と討論(1)
第15回	基本的な文献の輪読と理解(10)	第15回	論文の作成経過と討論(2)
第16回	既存研究の整理と分析検討(1)	第16回	論文の章立ての再確認
第17回	既存研究の整理と分析検討(2)	第17回	論文作成経過の報告(1)
第18回	既存研究の整理と分析検討(3)	第18回	論文作成経過の報告(2)
第19回	既存研究の整理と分析検討(4)	第19回	論文作成経過の報告(3)
第20回	既存研究の整理と分析検討(5)	第20回	中間報告会への準備(1)
第21回	研究に関する構想の作成(1)	第21回	中間報告会への準備(2)
第22回	研究に関する構想の作成(2)	第22回	中間報告会への準備(3)
第23回	研究に関する構想の作成(3)	第23回	中間報告会の問題点の整理と反省
第24回	ロードマップの再検討と研究経過の報告	第24回	修士論文の完成
第25回	論文の草稿の作成(1)	第25回	修士論文の検討と部分的修正(1)
第26回	論文の草稿の作成(2)	第26回	修士論文の検討と部分的修正(2)
第27回	論文の草稿の作成(3)	第27回	修士論文の報告と討論(1)
第28回	論文の草稿の作成(4)	第28回	修士論文の報告と討論(2)
第29回	論文の草稿の作成(5)	第29回	修士論文の最終チェック
第30回	論文作成経過の報告	第30回	修士論文の問題点と今後の課題の確認

到達目標

- 会計理論及び制度の理解を深化させることができる。
- 論文作成に必要な会計理論を習得し、修士論文を完成させることができる。

履修上の注意

- 研究テーマに関する基本的な理解を身につけること。
- 研究の方向性を明確にすること。

評価方法

<研究指導 I >レポート報告(60%)、講義中の議論(40%)によって総合的に判定する。
 <研究指導 II >修士論文の完成度に応じて評価する(100%)。

テキスト

研究・指導上必要なテキストや参照文献などを適宜、指示する。

授業概要

＜研究指導 I＞ファイナンス、企業財務、証券投資等の分野で、修士論文作成に必要な専門知識、データ収集手法、統計確率・数理手法、文献探索方法、実証分析手法を指導し、修士論文テーマを決定し、修士論文計画書を作成することを目指します。

＜研究指導 II＞修士論文計画書に沿って、先行研究サーベイを進めて、仮説構築を指導します。その後、理論構築または実証分析を支援して、修士論文完成に導きます。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第1回	ガイダンス・オリエンテーション	第1回	論文構成の検討
第2回	学生の関心事項の確認	第2回	論文構成の検討
第3回	基本文献の報告と議論	第3回	中間報告の準備
第4回	基本文献の報告と議論	第4回	中間報告
第5回	基本文献の報告と議論	第5回	中間報告後の論点整理
第6回	基本文献の報告と議論	第6回	論文構成の再検討と銀論
第7回	基本文献の報告と議論	第7回	論文構成の再検討と銀論
第8回	研究テーマの検討	第8回	論文構成の再検討と銀論
第9回	研究テーマの検討	第9回	論文構成の再検討と銀論
第10回	研究テーマの検討	第10回	論文構成の再検討と銀論
第11回	必要な専門知識の確認	第11回	論文構成の再検討と銀論
第12回	必要な専門知識の確認	第12回	論文構成の再検討と銀論
第13回	データ収集手法の確認	第13回	中間報告の準備
第14回	データ収集手法の確認	第14回	中間報告
第15回	文献探索方法の確認	第15回	中間報告後の論点整理
第16回	文献探索方法の確認	第16回	論文作成上の課題確認
第17回	実証分析手法、統計手法等の確認	第17回	論文作成上の課題確認
第18回	実証分析手法、統計手法等の確認	第18回	論文作成の報告と議論
第19回	実証分析手法、統計手法等の確認	第19回	論文作成の報告と議論
第20回	先行研究の報告と議論	第20回	論文作成の報告と議論
第21回	先行研究の報告と議論	第21回	論文作成の報告と議論
第22回	先行研究の報告と議論	第22回	論文作成の報告と議論
第23回	先行研究の報告と議論	第23回	論文作成の報告と議論
第24回	先行研究の報告と議論	第24回	論文作成の報告と議論
第25回	先行研究の報告と議論	第25回	論文作成の報告と議論
第26回	先行研究の報告と議論	第26回	最終論文の報告と確認
第27回	研究テーマの調整	第27回	最終論文の報告と確認
第28回	研究テーマの調整	第28回	最終論文の報告と確認
第29回	論文構成の検討	第29回	最終論文の報告と確認
第30回	論文構成の検討	第30回	最終チェック
第31回	論文計画書の作成	第31回	最終チェック
第32回	論文計画書の作成	第32回	修士論文の完成報告

到達目標

＜研究指導 I＞修士論文のテーマを決め作成手法を習得して、論文のアウトラインを固め論文計画書にまとめる。

＜研究指導 II＞修士論文の作成を進め、確認・議論・中間報告を通して最終的な論文を完成する。

履修上の注意

＜研究指導 I＞基本文献と先行研究によりテーマの絞り込み、必要な知見や手法の習得に努めてください。

＜研究指導 II＞修士論文の作成が本格化します。作成・報告・議論のサイクルが中心になり、完成度を高めます。

予習・復習

＜研究指導 I＞各回で指導されたことを確実に準備してきてください。

＜研究指導 II＞各回で指導されたことを確実に修士論文に反映させて次回の臨んでください。

評価方法

＜研究指導 I＞報告、議論、課題への対応 70%と修士論文計画書の完成度 30%により総合的に評価します。

＜研究指導 II＞報告、議論、中間報告への対応 30%と修士論文の完成度 70%により総合的に評価します。

テキスト

必要に応じて指示します。

授業概要

〈研究指導 I〉 修士論文のテーマの設定・問題意識、修士論文の基礎となる文献学習などを中心とし、修士論文のアウトラインを作成する。また、学術論文の書き方を学ぶ。
 〈研究指導 II〉 研究指導 I でのアウトラインに基づき、修士論文の各章・各節の内容について議論を重ね、オリジナリティーのある研究を進める。修士論文を完成させる。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	ガイダンス	第 1 回	ガイダンス、研究指導 I の確認
第 2 回	修論のテーマ・問題意識についての議論	第 2 回	修論各章・各節の内容を議論する(1)
第 3 回	修論のテーマ・問題意識についての議論	第 3 回	修論各章・各節の内容を議論する(2)
第 4 回	基礎文献についての報告と議論(1)	第 4 回	修論各章・各節の内容を議論する(3)
第 5 回	基礎文献についての報告と議論(2)	第 5 回	一次中間報告会に向けた準備(1)
第 6 回	基礎文献についての報告と議論(3)	第 6 回	一次中間報告会に向けた準備(2)
第 7 回	基礎文献についての報告と議論(4)	第 7 回	中間報告会のふりかえりと今後の方向(1)
第 8 回	基礎文献についての報告と議論(5)	第 8 回	中間報告会のふりかえりと今後の方向(2)
第 9 回	基礎文献についての報告と議論(6)	第 9 回	修論各章・各節の内容を議論する(4)
第 10 回	基礎文献についての報告と議論(7)	第 10 回	修論各章・各節の内容を議論する(5)
第 11 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(1)	第 11 回	修論各章・各節の内容を議論する(6)
第 12 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(2)	第 12 回	修論各章・各節の内容を議論する(7)
第 13 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(3)	第 13 回	修論各章・各節の内容を議論する(8)
第 14 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(4)	第 14 回	修論各章・各節の内容を議論する(9)
第 15 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(5)	第 15 回	修士論文執筆の行程表(予定)の確認
第 16 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(6)	第 16 回	修士論文執筆の現在地の確認
第 17 回	修論テーマに関する文献の報告と議論(7)	第 17 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(1)
第 18 回	問題意識に基づくアウトラインの作成(1)	第 18 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(2)
第 19 回	問題意識に基づくアウトラインの作成(2)	第 19 回	二次中間報告会に向けた準備(1)
第 20 回	問題意識に基づくアウトラインの作成(3)	第 20 回	二次中間報告会に向けた準備(2)
第 21 回	問題意識に基づくアウトラインの作成(4)	第 21 回	二次中間報告会に向けた準備(3)
第 22 回	第 2 レベルのアウトラインの作成(1)	第 22 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(3)
第 23 回	第 2 レベルのアウトラインの作成(2)	第 23 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(4)
第 24 回	第 2 レベルのアウトラインの作成(3)	第 24 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(5)
第 25 回	第 2 レベルのアウトラインの作成(4)	第 25 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(6)
第 26 回	第 2 レベルのアウトラインの作成(5)	第 26 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(7)
第 27 回	問題意識・アウトラインに基づく文献(1)	第 27 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(8)
第 28 回	問題意識・アウトラインに基づく文献(2)	第 28 回	修士論文執筆状況の報告・議論・修正(9)
第 29 回	問題意識・アウトラインに基づく文献(3)	第 29 回	修士論文のチェック(1)
第 30 回	問題意識・アウトラインに基づく文献(4)	第 30 回	修士論文のチェック(2)
第 31 回	問題意識・アウトラインに基づく文献(5)	第 31 回	修士論文の最終チェック
第 32 回	文献報告と議論の総復習	第 32 回	修士論文に基づく今後の研究発展

到達目標

〈研究指導 I〉 テーマ設定、問題意識に基づき、関連領域の文献を読破して内容をまとめ、専門知識を深める。
 〈研究指導 II〉 計画的に執筆作業を進め、予定通り修士論文を完成する。

履修上の注意

指導教員に過度に依存することなく、自主的に修士論文執筆に取り組む姿勢が求められる。

予習・復習

修士論文の執筆に向け、自主的に予習・復習に取り組むとともに、指導教員の説明に従い予習・復習を進める。

評価方法

〈研究指導 I〉 問題意識を理論と結びつけ、修士論文のアウトラインを作成し、学術論文の書き方を修得できたか(50%)、加えて、主体的に修士論文へ向かって進んでいるかどうか(50%)、総合的に評価する(計 100%)。
 〈研究指導 II〉 修士論文の執筆に向け、オリジナリティーのある研究を進め、修士論文を完成させ、修士論文を提出したのちの学位論文発表会で口頭試問に答えられ適切に議論できたかどうかを総合的に評価する(100%)。

テキスト

必携のテキストは用いない。履修生自ら読むべき文献・論文を探索する(指導教員はそのサポートに徹する)。

授業概要

研究指導 I：1 年次>研究を行うための基本的な知識と素養を習得するための指導を行う。まずは文献の輪読を行いながら、文献の精読・報告、内容についての議論、等々を通じて研究するための基本的な素養を身につける。次に各自が研究したいテーマ論に関する諸テーマに基づく研究報告を行う。
 <研究指導 II：2 年次>各自が論文テーマを設定し修士論文作成するための研究指導を行う。各自のテーマに関連する文献収集および研究方法、論文作成の基本的な手法の指導を行う。論文作成の状況に応じて研究報告し議論しながら修士論文の完成を目指す。

授業計画

<研究指導 I >		<研究指導 II >	
第 1 回	ガイダンス	第 1 回	ガイダンス
第 2 回	テーマに関する文献研究	第 2 回	テーマに関する文献研究
第 3 回	テーマに関する文献研究	第 3 回	テーマに関する文献研究
第 4 回	テーマに関する文献研究	第 4 回	テーマに関する文献研究
第 5 回	テーマに関する文献研究	第 5 回	テーマに関する文献研究
第 6 回	テーマに関する文献研究	第 6 回	テーマに関する文献研究
第 7 回	テーマに関する文献研究	第 7 回	テーマに関する文献研究
第 8 回	テーマに関する文献研究	第 8 回	テーマに関する文献研究
第 9 回	文献に関する研究のまとめ	第 9 回	文献に関する研究のまとめ
第 10 回	テーマに関する事例研究	第 10 回	テーマに関する事例研究
第 11 回	テーマに関する事例研究	第 11 回	テーマに関する事例研究
第 12 回	テーマに関する事例研究	第 12 回	テーマに関する事例研究
第 13 回	テーマに関する事例研究	第 13 回	テーマに関する事例研究
第 14 回	事例研究のまとめ	第 14 回	事例研究のまとめ
第 15 回	研究報告	第 15 回	研究報告
第 16 回	研究テーマの検討	第 16 回	研究テーマの検討
第 17 回	研究テーマの検討	第 17 回	研究テーマの検討
第 18 回	研究テーマの報告	第 18 回	研究テーマの報告
第 19 回	研究テーマに関する文献探索	第 19 回	研究テーマに関する文献探索
第 20 回	研究テーマに関する文献探索	第 20 回	研究テーマに関する文献探索
第 21 回	研究テーマに関する文献探索	第 21 回	研究テーマに関する文献探索
第 22 回	研究テーマに関する文献研究	第 22 回	研究テーマに関する文献研究
第 23 回	研究テーマに関する文献研究	第 23 回	研究テーマに関する文献研究
第 24 回	研究テーマに関する文献研究	第 24 回	研究テーマに関する文献研究
第 25 回	研究テーマに関する事例研究	第 25 回	研究テーマに関する事例研究
第 26 回	研究テーマに関する事例研究	第 26 回	研究テーマに関する事例研究
第 27 回	研究テーマに関する事例研究	第 27 回	研究テーマに関する事例研究
第 28 回	小論文の作成	第 28 回	小論文の作成
第 29 回	小論文の作成	第 29 回	小論文の作成
第 30 回	小論文の研究報告	第 30 回	小論文の研究報告

到達目標

研究指導 I：修士論文のテーマ設定と先行研究の分析
 研究指導 II：修士論文の完成

履修上の注意

1 年次において、テーマ論の体系的理解を目指し、相当の分量の文献研究を行う。また修士論文につながる研究テーマを設定し小論文を執筆しなければならない。
 2 年次において、研究アプローチについて理解し、先行研究の分析を行い、最終的に論文作成へと向かうため、先行研究に関する文献および研究アプローチについての文献を検討する必要がある。

評価方法

1 年次において、研究報告と議論の質（60%）および積極性（40%）により評価する。
 2 年次において、中間報告を必須とし修士論文の内容（50%）と水準（50%）により評価する。

テキスト

使用しない。

授業概要

＜研究指導 I：1 年次＞ 経営学における学術論文や文献を丁寧に読み、経営学特有の考え方や論文の執筆の仕方について議論します。

＜研究指導 II：2 年次＞ 受講者それぞれの研究テーマに添った研究指導に基づき、論文を作成・完成させます。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第 1 回	ガイダンス	第 1 回	ガイダンス
第 2 回	輪読①	第 2 回	研究の背景・問題意識①
第 3 回	輪読②	第 3 回	研究の背景・問題意識②
第 4 回	輪読③	第 4 回	リサーチクエストの設定①
第 5 回	輪読④	第 5 回	リサーチクエストの設定②
第 6 回	輪読⑤	第 6 回	リサーチクエストの設定③
第 7 回	輪読⑥	第 7 回	方法論の検討・決定①
第 8 回	輪読⑦	第 8 回	方法論の検討・決定②
第 9 回	輪読⑧	第 9 回	先行研究調査①
第 10 回	輪読⑨	第 10 回	先行研究調査②
第 11 回	輪読⑩	第 11 回	先行研究調査③
第 12 回	経営学研究の方法論①	第 12 回	先行研究調査④
第 13 回	経営学研究の方法論②	第 13 回	データの収集・分析①
第 14 回	経営学研究の方法論③	第 14 回	データの収集・分析②
第 15 回	経営学研究の方法論④	第 15 回	データの収集・分析③
第 16 回	学術論文を読む①	第 16 回	データの収集・分析④
第 17 回	学術論文を読む②	第 17 回	データの収集・分析⑤
第 18 回	学術論文を読む③	第 18 回	修士論文の構成検討①
第 19 回	学術論文を読む④	第 19 回	修士論文の構成検討②
第 20 回	学術論文を読む⑤	第 20 回	修士論文執筆①
第 21 回	研究目的についてディスカッション	第 21 回	修士論文執筆②
第 22 回	研究テーマの設定①	第 22 回	修士論文執筆③
第 23 回	研究テーマの設定②	第 23 回	修士論文執筆④
第 24 回	先行研究調査・発表①	第 24 回	修士論文執筆⑤
第 25 回	先行研究調査・発表②	第 25 回	修士論文執筆⑥
第 26 回	先行研究調査・発表③	第 26 回	修士論文執筆⑦
第 27 回	先行研究調査・発表④	第 27 回	修士論文執筆⑧
第 28 回	データの収集①	第 28 回	修士論文執筆⑨
第 29 回	データの収集②	第 29 回	修士論文執筆⑩
第 30 回	まとめ	第 30 回	まとめ

到達目標

研究指導 I：経営学の学術論文、経営学研究の考え方ややり方について理解できる

研究指導 II：経営学の学術論文が執筆できる

履修上の注意

特になし。

評価方法

研究指導 I：課題・レジュメの内容と議論への貢献により評価します

研究指導 II：研究・論文執筆の理論的理解と完成した修士論文を評価します。

テキスト

受講生の研究テーマを勘案し決めます。

授業概要

〈研究指導Ⅰ:1 年次〉 前期は、国際金融論・国際マクロ経済論に関する修士論文作成に必須となる国際金融の理論面を中心に文献輪読による指導を行う。後期は、研究テーマの決定および研究計画の作成について指導を行う。
 〈研究指導Ⅱ:2 年次〉 受講生各自の研究テーマおよび研究計画に沿った研究指導を行う。特に、先行研究の批判的考察を通じて「Something New (何か新しいこと)」が発見できるように指導する。

授業計画

〈研究指導Ⅰ〉		〈研究指導Ⅱ〉	
第1回	外国為替市場と国際収支統計	第1回	参照文献リスト：再提出・体裁の修正
第2回	経常収支と国民経済計算	第2回	アウトラインの階層：細分化報告
第3回	異時点間の最適消費：生産と経常収支	第3回	先行研究：サーベイ報告(1)
第4回	小国の1財・2期間モデル	第4回	先行研究：サーベイ報告(2)
第5回	2国モデルと世界利子率	第5回	先行研究：サーベイ報告(3)
第6回	為替レートと経常収支	第6回	中間報告会：プレゼン練習(1)
第7回	資本の限界生産性と国際資本移動	第7回	中間報告会：プレゼン練習(2)
第8回	リスクの国際分散	第8回	中間報告会：リフレクション
第9回	金融の国際化	第9回	先行研究：批判的考察(1)
第10回	為替レートの決定理論：購買力平価説	第10回	先行研究：批判的考察(2)
第11回	為替レートの決定理論：開放マクロモデル	第11回	先行研究：批判的考察(3)
第12回	固定為替レートと外国為替介入	第12回	論文作成経過：報告(1)
第13回	国際通貨システムの歴史	第13回	論文作成経過：報告(2)
第14回	国際通貨システムの機能・特性・諸類型	第14回	論文作成経過：報告(3)
第15回	累積債務問題	第15回	アウトライン：再確認
第16回	受講生の関心のありかを探る(1)	第16回	修士論文の草稿：提出
第17回	受講生の関心のありかを探る(2)	第17回	「Something New」の明確化
第18回	受講生の関心のありかを探る(3)	第18回	修士論文の草稿：体裁の修正(1)
第19回	研究テーマの選定：文献渉猟報告(1)	第19回	修士論文の草稿：体裁の修正(2)
第20回	研究テーマの選定：文献渉猟報告(2)	第20回	修士論文の草稿：体裁の修正(3)
第21回	研究テーマの選定：文献渉猟報告(3)	第21回	中間報告会：プレゼン練習(1)
第22回	研究テーマの決定(1)	第22回	中間報告会：プレゼン練習(2)
第23回	研究テーマの決定(2)	第23回	中間報告会：プレゼン練習(3)
第24回	研究に関する構想：報告(1)	第24回	中間報告会：リフレクション
第25回	研究に関する構想：報告(2)	第25回	修士論文の部分的修正：報告(1)
第26回	研究計画の報告(1)	第26回	修士論文の部分的修正：報告(2)
第27回	研究計画の報告(2)	第27回	修士論文の完成稿：提出
第28回	研究計画の報告(3)	第28回	修士論文発表会：プレゼン練習(1)
第29回	アウトライン：報告	第29回	修士論文発表会：プレゼン練習(2)
第30回	参照文献リスト：提出・体裁の修正	第30回	修士論文発表会：プレゼン練習(3)

到達目標

- ・国際経済学の基礎理論を踏まえ、日本を含む国際経済の現状と課題を的確に把握し、自分の主張を述べることができる。
- ・世界経済の動向を分析、予測することができる。

履修上の注意

この授業は、PBL (Project Based Learning) を積極的に使い、学生間での意見交換を重視し参加型の演習を行う。また、通常の学内教室以外で授業(学外授業)を実施する場合がある。なお、遅刻3回で欠席1回分にカウントする。授業において特別講師等を外部から招聘する場合がある。

評価方法

〈研究指導Ⅰ〉 レポート報告 100%で評価する。また、毎回出席を取る。
 〈研究指導Ⅱ〉 修士論文 100%で評価する。また、毎回出席を取る。

テキスト

- ・教科書名：国際金融論
- ・著者名：河合正弘
- ・出版社名：東京大学出版会
- ・出版年月：1994年6月 ISBN：9784130420419 本体 5600円+税

授業概要

担当者は主に①東南アジア経済、②企業の環境経営に関する実証研究を行っており、それらの分野に関する知識修得と論文作成指導を行う。

〈研究指導 I〉 輪読や文献収集、議論を通して修士論文のテーマの設定し、修士論文のアウトラインを作成する。また、学術論文の書き方を学ぶ。

〈研究指導 II〉 研究指導 I での学修を踏まえ、先行研究の検討や分析を進める。同時に修士論文の各章・各節の内容について議論を重ね、オリジナリティーのある研究を進める。最終的には修士論文を完成させる。

授業計画

＜研究指導 I＞		＜研究指導 II＞	
第1回	ガイダンス・研究指導の概要	第1回	ガイダンス・修士論文提出までの計画を確認①
第2回	学術論文の書き方・先行研究の集め方	第2回	先行研究の検討・報告・分析・執筆①
第3回	学生の興味関心の確認・議論	第3回	先行研究の検討・報告・分析・執筆②
第4回	東南アジア経済に関する先行研究の読解①	第4回	先行研究の検討・報告・分析・執筆③
第5回	東南アジア経済に関する先行研究の読解②	第5回	研究進捗報告・議論①
第6回	東南アジア経済に関する先行研究の読解③	第6回	先行研究の検討・報告・分析・執筆④
第7回	東南アジア経済に関する先行研究の読解④	第7回	先行研究の検討・報告・分析・執筆⑤
第8回	企業の環境経営に関する先行研究の読解①	第8回	先行研究の検討・報告・分析・執筆⑥
第9回	企業の環境経営に関する先行研究の読解②	第9回	研究進捗報告・議論②
第10回	企業の環境経営に関する先行研究の読解③	第10回	先行研究の検討・報告・分析・執筆⑦
第11回	企業の環境経営に関する先行研究の読解④	第11回	先行研究の検討・報告・分析・執筆⑧
第12回	研究テーマの選定・基礎的文献の収集①	第12回	先行研究の検討・報告・分析・執筆⑨
第13回	研究テーマの選定・基礎的文献の収集②	第13回	研究進捗報告・議論③
第14回	研究テーマの選定・基礎的文献の収集③	第14回	研究進捗報告・議論④
第15回	研究テーマの発表・議論①	第15回	研究進捗報告・議論⑤
第16回	論文執筆スケジュールの作成・議論①	第16回	修士論文の初稿提出
第17回	研究テーマの発表・議論②	第17回	修士論文提出までの計画を確認②
第18回	論文執筆スケジュールの作成・議論②	第18回	研究進捗報告・報告・分析・執筆・修正①
第19回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論①	第19回	研究進捗報告・報告・分析・執筆・修正②
第20回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論②	第20回	研究進捗報告・報告・分析・執筆・修正③
第21回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論③	第21回	研究進捗報告・報告・分析・執筆・修正④
第22回	研究進捗報告・議論①	第22回	修士論文2次稿の発表と提出
第23回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論④	第23回	修士論文2次稿の修正①
第24回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論⑤	第24回	修士論文2次稿の修正②
第25回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論⑥	第25回	修士論文2次稿の修正③
第26回	研究進捗報告・議論②	第26回	修士論文3次稿の発表と提出
第27回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論⑦	第27回	修士論文3次稿の修正①
第28回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論⑧	第28回	修士論文3次稿の修正②
第29回	基礎的文献の収集・読解・発表・議論⑨	第29回	修士論文3次稿の修正③
第30回	研究進捗報告・議論③	第30回	修士論文発表会にむけた準備①
第31回	論文執筆スケジュールの作成・議論③	第31回	修士論文発表会にむけた準備②
第32回	期末レポート	第32回	修士論文の最終提出

到達目標

〈研究指導 I〉 輪読や文献収集、議論を通して、修士論文のテーマの設定と関連知識を身に付けることができる。また、学術論文の書き方を学び、修士論文のアウトラインが作成できる。

〈研究指導 II〉 アカデミックに重要な貢献を含んだ修士論文を執筆することができる。

履修上の注意

毎日少しの時間でよいので、研究に向き合うようにしてください。

予習・復習

予習：各回の授業や修士論文に関する文献収集、学修、資料作成

復習：各回の授業で出たコメントなどを振り返り、修士論文や自身の学修に役立てる

評価方法

〈研究指導 I〉 各回の報告・議論の貢献度 50%、期末レポート 50%

〈研究指導 II〉 各回の報告・論文進捗度 50%、修士論文の完成度 50%

テキスト

必要に応じて適宜指示します。

授業概要

〈研究指導 I：1 年次〉 修士論文作成のための基礎的知識と方法を指導する。また、テーマに関連する学術論文や文献を読み、基本となるレビューを行う。

〈研究指導 II：2 年次〉 研究テーマに添った研究指導に基づき、論文を作成・完成させる。

授業計画

〈研究指導 I〉		〈研究指導 II〉	
第 1 回	オリエンテーション	第 1 回	オリエンテーション
第 2 回	文献レビューの方法	第 2 回	研究進捗報告①
第 3 回	学術論文の書き方	第 3 回	文献レビューと議論②⑩
第 4 回	文献レビューと議論①	第 4 回	文献レビューと議論②⑪
第 5 回	文献レビューと議論②	第 5 回	研究進捗報告②
第 6 回	文献レビューと議論③	第 6 回	文献レビューと議論③⑫
第 7 回	文献レビューと議論④	第 7 回	文献レビューと議論④⑬
第 8 回	文献レビューと議論⑤	第 8 回	研究進捗報告③
第 9 回	研究テーマ発表①	第 9 回	研究進捗報告④
第 10 回	文献レビューと議論⑥	第 10 回	研究進捗報告⑤
第 11 回	文献レビューと議論⑦	第 11 回	文献レビューと議論⑤⑭
第 12 回	文献レビューと議論⑧	第 12 回	研究進捗報告⑥
第 13 回	文献レビューと議論⑨	第 13 回	研究進捗報告⑦
第 14 回	研究テーマ発表②	第 14 回	第 2 回中間報告
第 15 回	第 1 回中間報告	第 15 回	第 2 回中間報告
第 16 回	研究テーマ発表③	第 16 回	修士論文執筆状況報告①
第 17 回	文献レビューと議論⑩	第 17 回	修士論文執筆状況報告②
第 18 回	文献レビューと議論⑪	第 18 回	修士論文執筆状況報告③
第 19 回	文献レビューと議論⑫	第 19 回	修士論文執筆状況報告④
第 20 回	文献レビューと議論⑬	第 20 回	修士論文執筆状況報告⑤
第 21 回	文献レビューと議論⑭	第 21 回	最終報告
第 22 回	研究テーマ発表④	第 22 回	最終報告
第 23 回	文献レビューと議論⑮	第 23 回	修士論文執筆状況報告⑥
第 24 回	文献レビューと議論⑯	第 24 回	修士論文執筆状況報告⑦
第 25 回	文献レビューと議論⑰	第 25 回	修士論文執筆状況報告⑧
第 26 回	文献レビューと議論⑱	第 26 回	修士論文執筆状況報告⑨
第 27 回	研究計画発表①	第 27 回	修士論文の最終確認
第 28 回	文献レビューと議論⑲	第 28 回	修士論文の完成報告
第 29 回	研究計画発表②	第 29 回	修士論文の完成報告
第 30 回	1 年次最終報告	第 30 回	修士論文の完成報告

到達目標

- 一定の水準の学術研究を行うことができる。

履修上の注意

大学院生として、真摯に研究活動に取り組むこと。

評価方法

修士論文への取り組みで評価する（100%）。

テキスト

特に指定しない。